足利三代記

全

163
104

東京金松堂發行

序

我が朝往古の出師の征伐等の事あるにあらされば冠を脱せすと桓武帝の朝に当り蝦夷頻りに叛き又た屡々内乱あり此際外に在りて多年干戈に従事し遂に之を征伐し又た嵯峨帝の御宇に藤原仲成の乱を鎮定したる坂上田村麿将略兼ね備はりし英将にて容貌魁偉目は鷹隼の如く髯は銀線の如くにして一トたび瞋目する時は彼の長板橋に於て百萬の大軍を睥睨せし張飛の眼光より鋭は鋭尖く如何なる猛獣と雖も皆習服すと況んや人間に於

てそや誰ゕ能く之ニ敵する者あらん故ニ蠻夷を征服せしならん然れども又た平居衣冠を禦ひ人と談笑する時ハ婦女幼童も馴れ親しむと書肆明三閣今將軍の傳を出版せり是れ必らず婦女幼童の喜ぶものと聊か鑒定を述ぶ

明治廿年五月

竹葉舎晋升

田村三代記

○星帝誕生記

夫倩々世間萬婆和漢帝愛鄙謡華麗考へ見るニ誠ニ大慈大非観世音長閑に住る春の日の治る御代ゑそ目出度けれ爰に都ニ於て音羽山清水寺を御建立被成ける田村三代の御由來を委しく尋ね奉るに人皇五拾代桓武天皇の御宇ニ當りて都に不思儀の大變出ニける故を委敷尋ぬるニ帝より南未申に當りて八尺余りの星一ッ出ニける高きも賤きも此星見る者ハ忽地病を引請る帝彼星を叡覽有て忽ち御悩と成給ふ公卿大臣驚き種々に手を盡すと雖ども其甲斐無りける天學者阿部康光を召れ急き一參仕つき畏まりしと紫震殿の角の間に取籠り壹のよふ文唱へ六十二の暦に八十三の箕木をぐもらく〳〵と投付け表白年裏百年十二のゑとを考へ居たりしか良有て横手を打て扌様帝の御悩ハ尋常のとふましまさす南の空成る悪星を御叡覽ましく〳〵て御悩とふらせ給ふなり去ながら化星の内より觀音利生の若君誕生ましまそに相違無く是ハ御祈禱仕つらんと清凉殿に粒を飾りとつて花皿鈴錫杖五色の幣帛を振立〳〵かんたん碎き三日三夜の御祈禱ゑ叫得て由々敷けれふしきやな此星御祈禱の奇特故ゕ忽ち南北へ失にけり玉躰御悩次第ニ晴させ給ふ大臣悦び博士ニハ過分の御褒美與へけり是ハ扨置其頃丹波國の百姓右衛門作と云者あり丹波と丹後の

國境にて星の中より生れたる若を壹人捨ふたり右衛門作不思儀に思ひ取上見るに弓手の御目に觀音御來光馬手に栗柄不動三尊立せ給ふ右衛門作不思儀に思ひ是ハ尋常あらす佛菩薩の再來の若に違ひなし御池頭へ申上んと件の若を指上る中冨中納言秀康ふしきにおもひ我計らひならずと若をいたき參內有て此所以を奏聞す帝御簾高く揚させ給ふて彼若を叡覧有て誠に博士の云如く星の中より誕生したるに相違なし能々守立申可との宣旨之畏まつて中納言彼若をハ乳母を數多付置て能に養育被成ける誠に此若の御成人背にはへたるたらんなの夜中の露にはてくまれ尺に昇るか如く之はや三才に被成玉ふ才知世に越させ他の子の五六才かと見得にける元より怜悧聰明にて一字を習ひ十を知り十を學んて百字を悟り光陰ハ矢の如し五六才早過て御歳七ツと申にハ誠に怜悧世に越てはや拾歳に成給ふ其行抜群に見へけれハ帝叡覧あらせられ其若が丈を指て見よとの宣旨之畏て中納言彼若かせいをさすに身の丈五尺八寸三分と註ハ見へにける帝又一入の御感なり誠に稀成る若なれハ元服せんよとの宣旨之則ち五條中將年春に任せられ冠 装束を給ハりて昇殿をもるされける扨其後ハ宣旨にハ如何に年春汝ハ天竺より下りし者なれハ天にハ十二の星の舞有と聞朕が前にて一さし舞との旨宣之年春畏り宣旨の如く天竺ハ浄梵浄往王のうそあと云國にて十二の菩薩の舞遊び先日本の下梵下往蘆原の國にてひへハ菩薩の舞ハ勿体るしと奏問する玉躰甚と逆鱗ましく／＼て如何に年春我十善萬乘の御位之朕か前にて一さし舞とて何の子細ヶ有へきぞ朕をあさむきし曲者はや退けとの宣旨にて北陸道ハ越前の國三國ヶ浦へと流さるいたはしや年春ハよし無きとを奏問なし三國ヶ浦の浮住居目も當られぬ露けき小屋におほします喰事と申せバ都にて歌ハ詠と喰さる粟やひゑを飯となさ餘りのとの淋しさに歌を詠み詩を作りらん竹のよふてふお世を爺て八ツの歌口床夏の花の露にて打玄めし雲井にはつと打揚て日夜共なく吹給ふあら面白や笛の音と浦人共是を聞配所の殿ハ面白き竹を鳴させ給ふと我もく／＼と聽聞を是ハ扨當此山陰にハ名をハ繁井ヶ池に住居する龍差と云大蛇あま彼笛を聞よりも扨面白の笛の音や我ハ龍差の身なれ共五衰三熱の苦しみ深し如何にもして彼笛聞ならバ三熱の苦しみ遁れんと蛇身の姿を忽ちに眉目能女と顯れ夜更て配所に通ひ笛を聽聞したりけるにしきやな此女夜たに明れハいつしか失て日たに暮れハ通ふ之年春ハ御覧して如何に女中よの者ハ日に通ひ夜にさへなれハ歸る之御身未二八の者なるが夜更て是へ來るなり子細ハ如何にと仰せける女畏り御不審な御尤も自ハ此山陰の長者が水婢でひが鎜ハ主人の奉公ましけゝれハ通ふて聽聞なりりたし夜更て是へ來るあり哀れど思し召れぬかと細々數ぞ語りける年春此由聞よりも扨ハ不便の次第之更ハ吹て聞せんと宣ひて樣々笛を遊びける女ハ此笛聞よりもあら面白の笛の

音と年春の御前近に立寄れバ年春余りの淋しさに女になじませ玉へ互ひに打語らひ打解て終にハはらませ給ひける角て月日を經る程に不思儀な此女懐妊後一年二年早過て三年にこそハ成給ふ年春ハ御覧して如何に御身ハ此山陰の賤の女と申せしが常に来る人も無く剰さへ三年を是にて送るあり子細あらめと仰せ之女ハ承まり扨自ハ賤の女とハ申せども天竺にてハか君の御笛面白さに天下りて聴聞えたる咎により天の羽衣奪はれて二度天に行へき様も無し是にて月日を送る之年春御覧して夫ハ兎も角もあれ惣て人の臨月といふハ心經の文字の數二百七拾四箇日に究れり御身ハ三年になりけれど産の紐を解ぬハふしぎん女承まり仰せは尤もなれハか日の本の臨月ハ月を主計て九月半なり當る十月が臨月あれど惣して天の習ひにて三年三月に究りたる自も三年三月にてハ得ハ早臨月に當つてハ之水の邊にて産の紐を解き申たし此山陰に繁井ヶ池に極丈高く屋倉を揚産屋をから繰給ふへし早疾々と申あく年春心得ハと浦人共に仰せ給ひて山陰なる繁井が池に極丈高く屋倉を揚け頓て産屋をからくり年春悦び如何に女産屋ハ出來ハぞ女承りにハ有難き次第之然しながら哀に願ひのハそやなせと申に百日過ぬ其内ハ往來を留て給ふへし百日過ぬ其内ハ君も産屋をば覧被成間敷百日百夜が立ならハ玉の様なる若をいたさ参らん去ハ御暇乞申迎繁井ヶ池へと急がるゝ然るに年春ハ跡にて壹人月日を送らせ給ふ所に程なく九十九

夜にも成ければ余り床敷思し召配所を立出繁井が池へと趣きて彼所なる産家をば覧被成しにあら恐敷や櫓の上にハ廿尋の大蛇顕れて眼の光りハ日月の如し紅ゐの舌を巻出し十六の角ハ冬枯の木々の稍の如く之鱗逆立おまろの合より玉の様成る若をいたき乳を含めて居たりける年春はば覧してあら恐敷の大蛇やと配所を指て迯給ふ配所に歸りて口説とこそ哀れよしなき女に契りを迷習日にもならハあの大蛇若をいたきて参らんか其時こそハ何と爲べきとぞとて暫し消よむせ給ふ角て其夜も明ければ件の大蛇ハ又も姿を變して眉目能女と顕れて配所にきそれハきんつ〳〵と來りけるのに如何に我君よ御約束の甲斐もなく産屋を御覧じ給ふこそ思へハ〳〵恨しや責て此子が三才に成迄も止り度ハ思へ共殿に姿を顕ハせハ留るとハ叶ぬ之如何に此若ハ末に果報由々敷生れ之母か名殘も是迄ぞ去ハ形身を得させんと神通のかぶら矢一對取出し母か形身と長く見よとば暇乞申夫の殿名殘惜や此若とかげろう稲妻水の月消て姿ハ無りける年春ハば覧してこハ何事ぞ情無や責て此子が三才に成迄も止り呉よと歎け共更に其かひ無りけり懸る所に西の空かすかに聲のあられける如何に年春我を誰と思ふらん兼て信心する八幡大菩薩之日本悪魔降伏の爲に大蛇に契りを込させて其若を授けたり此事都へ聞得なハ早速に綸旨下り親子ハ目出度歸参なるべきぞ行末守るぞ信心怠るなかれといふかと聞ゑて白鳩と現じ西の空よ飛給ふ年

春は有難し有難やと虚空を三度伏拜みなれ共別れは悲しく如何に此若縦令八幡宮の授けあれは逆乳房の母に別れては何とて育つや此若と聲を揚てそ泣給ふなれ共叶はぬとなれは浦人共の情にて彼若を能々養育被成ける年春の心細さは限り無く是は扨置此事四方に陰無花の都にもれ聞得都にては臣下大臣を召れて奥よりの宣旨には年春へ敕免の綸宣可被下との詮に畏て中納言勅使として三國ヶ浦へと下らるゝ配所に至りて年春に對面し勅諚の趣きには敕免の綸旨を被下るゝは有難しと年春は敬つて拜し奉る夫よりも浦人共に暇を乞若君を相伴ない三國ヶ浦を立せ給へは浦人共は名殘を惜まれて我も／＼とは門送りをなし奉る名殘は盡とあれはまは／＼と別れつゝ都を指て登らるゝ斯て帝都になりけれは時の裝束改正めて内裏へそ參内そ御階近ふ平伏そ帝は御簾高く卷揚させ給ふ奥よりの宣旨には如何に年春汝在も無事により長々の罪科赦や不便の次第ゝ然共汝は大蛇に縁を求め若を設けたるとの叡聞ゝ是に召との勅定ゝ年春は畏て若を召つれは階近く畏る帝つく／＼叡覧あり不思儀やる此若は大蛇は胎内に宿りたる者なれは逆大蛇丸に任せらる能よ育ておけとの宣旨にて年春はは請を乞彼若に乳母を附置て能々養育被成ける光陰は矢の如し早三才に成給ふ賢きとは世の常の子五六才に見えにける早年月を經程に十三才に成給ふ其丈はつくんよ見えけるり帝つく／＼叡覧在し元服させよと宣旨よて十三の年

重ねて二條の中納言年光に任せられ直に二條堀川には殿造りを被成ける棟にむね門内に屋形を建並へ誠に由々敷榮へける是は扨置其頃は大和山城の境なる今瀬ヶ淵には大蛇が住萬民の難儀と成故に兩國より都への早打は櫛の歯を挽が如し帝大に驚かせ給ひ油斷のしてハ叶はぬ間數年光を召との宣旨之頓て勅使を立らるゝ何事ならんと年光は時の裝束改めて急ぎ參内あり其時の宣旨には汝を召と別儀にあらず山城大和の境ある今瀬ヶ淵に大蛇が住萬民を惱ますを故汝は大蛇の胎内に宿せし者なれバ是を退治仕つれとの院宣之年光は畏り急ぎ内裏を退出有り二條のは所にも成ければ吉日を撰まれて御裝束を被成ける肌には白き練絹に召甲綴の大鎧同毛の甲を召れ金作りの太刀をはき村重藤の五人張神通の鏑矢筈高に負ふして駒に取ては明三才の逸物に金覆輪の鞍置て御身輕けにゆらと召惣して御供二百余騎指替を引具して今瀬ヶ淵へと急かるゝ彼所に至れバ淵に向て二百余騎時をつくらに上げける年光は馬を一陣に乘出し大音揚け如何に此淵に住居する大蛇汝化粧するに依添けなく二條中納言年光帝よりの宣旨を蒙り汝を退治に向ふ之尋常に顯はれ勝負をせよと呼はつたり然る所に不思儀やな淵色五色に替ると見えけるか逆巻浪を押分かき分長廿尋の大蛇顯はれ眼を瞋らし紅ゐの舌を出し炎をはき懸け年光を目懸け只一口と白眼寄二百余騎の軍卒共南無三寶大蛇が顯はれたるぞと跡をも見ずして迯にける年光此由御

覽して望む所の大蛇なるはと五人張に神通の鏑矢を取てからりと打つかへ本筈末筈一ツになれと引ゑはり暫堅めて放つ矢は何かは以て溜るへき其矢はあやまたそ大蛇の眉間に矢ふくろ貴て立にける不思議やな大蛇は消て姿は無りける五色の浪も靜に年光此よしは覽してあれ何事そ情無や大事の宣旨を蒙る身か大蛇の姿を見失ひ殊に母より給はりける神通の矢を失ひしと口惜や此上は巴水の底火の底ならくの底迄もくゝられくゝれ安穩に置へきやと鎧物の具ぬき捨玉ひ金作りの太刀を口に啣へ淵にさんぶと飛込んたり叟や彼所を探さるゝ二百余騎の供は我君樣は大蛇のゑおさきと爲成玉ふかと周章狼狽ゐたりけるあれ共年光水練の達者にて叟の隅彼所の隅尋ねける戌亥に當つて僅の淵をは覽して千尋の底へと潜らるゝ五色の浪へ分入ては覽し玉へは以前の大蛇が眉間に矢を脊負ひ高うおりしてみそ伏居たり年光大音揚如何に大蛇微勞なり日本無双の年光は大事の勅諚蒙りて汝が姿を見失へ是迄追懸來るぞや返して勝負を仕れ然る所に龍の左右を守る毒蛇毒女是を見て我君樣の敵ぞと其冠者を迯そなと一度にとつと馳集まり年光へ向はんとそる所其時大蛇大聲揚ヤア毒蛇共必ず麁相致そなよ添けなくも其が先祖は星の中よりは誕生遊はして五條中將年春公其若君は三國ヶ浦繁井か池の大蛇の胎内に三年三月宿られては誕生ましますゝ去るに依て繁井が淵の大蛇こそ今は成佛致されて大蛇の苦現を免かれて龍神とは

それ顕はれたり我も又其若君の御手に懸れハ神や佛と成へきぞや必す麁相を致そまじと主人の仰せに畏り毒蛇毒女ハ元の所へ立歸り働く所存ハ無りける若君此由御覺して頼母敷大蛇かな更ハ汝を我手に懸け五衰三熱の苦しみを除て與んと宣ふて小金作りの御佩刀そらりと抜はなし丈廿尋の大蛇をずた〳〵に伐らせ給ふ大蛇の角と牙とを打切たり神通の鏑矢相違なく持せ給へ淵を潛り岸に浮はせ玉ひ直に陸に上られける二百余騎の御供ハこれハ我君樣再度世に歸らせ玉ふ迎御馬に乘せ奉つり淵に向つて鬨の聲を揚つゝ都を指てハ歸陣ハ目出度かりける次第之帝都に着や直に内裏へ參内あり御階近ふ畏る今瀨ヶ淵の事共を不殘奏問被成ける大蛇の角と牙を捧らる帝つく〳〵叡覽あり誠に汝は國土を騷かそ大蛇を退治の段神妙之去に依て此度の御褒美として時の武將に任せられ冠裝束給はりて昇殿を許されけるにハ有難しと年光ハ急き御殿を退出有り直に大蛇の角と牙を九條の羅生門の戌亥の方に當りて角田の明神と祝立て扨夫より年光ハ二條に入らせ玉ひつゝ三日三夜の御祝儀ハ花も咲かと見えにける帝都を守護し奉る武家の政道執行ひ四海の浪も靜にて治る御代こそ目出度かりける次第なり

去程に茲に三ッの災ひ出來にける其頃出羽奥州と申すハ國司無れハ國治らず大名ハ境を爭そひ又地頭ハ百姓へ惠無けれハ百姓ハ地頭へ向ひ竹弓を引心なれハ夷ハ去やもに向つて半弓毒矢を放そと畏多し國土の乱甚だし何卒能國司を下し給れと出羽奥州より都への早打ハ櫛の齒を引ゝ如く之帝大に驚かせ給ひ油斷をしてハ叶ふ間敷と早速年光を召との宣旨之頓て勅使を立らるゝ何事やらんと年光ハ御裝束を遊ハして急き參内せられける其時の宣旨にハ汝を召と別義にあらず出羽奥州に國司無れハ國治らず大義なから奥州に下り三ヶ年國司を致し目出度國政を執行ひ然して上洛を被致よ扨又國司に下るにハ身分無てハ叶ふ間敷依て鎮守府將軍陸奥守に任せられ冠裝束を給はりたりこは有難しと將軍ハ急ぎ御殿を退出す二條の御所にて吉日を撰み御家の郎等霞の源太森隅其外二百余騎引具して奥州指て下らるゝ此事四方に隱れなく出羽奥州へも聞えたり兩國の諸大名此事を聞此度都より國司下らせ給ふ之國司の御先祖ハ星の内より御出生坐在して五條中將年春公の御子息今度の國司ハ三國ヶ浦の繁井か池に住居せる龍差玉と云大蛇の胎内に三年三月宿らせて御出生坐在バ尋常の人でなしとサア下らぬ先より恐をなせバ今ハ諸大名皆々和合して國司の御迎へに白川一所の關へと詰にける斯て將軍ハ夜を日に繼て下り奥州に御着有けれハ諸大名に御對面坐在て軍將御機嫌限りなく早打立との御諚あり二百余騎に騎馬打せさゞめき渡つてハ下向あり宮城郡鷹の舘に御殿造營被成ける棟に宗門に屋形を立並べ國司を移し奉る奥州方の一黨ハ日番當番滯りもなく日夜の出仕被成ける去バにや將軍ハ諸大名ハ別して

制し玉ひ大名小名和合して地頭も恵在れハ百姓ハ地頭を敬ひ奉りまやもハ夷ニ心有れハ夷ハま
やもふ相馴て乱れ切たる出羽奥州夷松前の果迄も弓矢ハ袋ふ納りて當人國を治るとハ此若君の
とゝ申し其後國土ハ静にて一年二年も早過て三年に成りにけれハ將軍殿の源太を召さつゝ如何
に森隅三ヶ年の武將を崇りて下るゝ三ヶ年も恙無く勤めていゝ東より都への土産もの何か珍恐
の物有間敷かと御諚之森隅ハ畏り御諚の趣き諸大名へ相述けれハ大名小名畏り仰せの如く黒川
郡七ッ森と申ハ音に聞ゆる高山ふて峯深き山なれハ御狩を遊れして然るべし數多の毛物の共
内に熊の出ぬと有間敷彼の熊の皮こそハ都への献上可然と申せハ將軍ハ機嫌浅からず早打立
との御諚之畏りて人々ハ近郡へ一々次第を觸渡せハ百姓共國司の御狩なり逆我も〳〵と七ッ森
へと詰にける中に取ても苅田紫田に伊具亘理名取國分宮城ニ牡鹿岩井大崎近郡の諸大名御近所
たり迚鷹をゆるされ玉ひける天にハ鷹の鈴の音中ふハ駒の轡の音さゝめき渡て七ッ森へと詰に
ける彼所ニハ馬の立所も無りける斯て御狩も始まりけり其頃の時代ハ鐵炮と云物未だ此國へ渡
ら以先のとなれハ弓ふて射留る者もあり又ハ組留指通し分捕高名夥多敷見えふける既に其日も
暮けれハ明る二日目の御狩ハ三四ノ森とつぶしける斯る所ニ不思儀やな南の方より大樹を鳴し
小木を蹴倒し翔來るハ何なるらんと見て有ハ七尺余りの猿一疋虛空を拂ふて來りける照井太郎

是を見て望む所の猿なるかと押寄てむつと組上を下へと爭ひける年ふる猿のとなれハ甚かしこ
く照井も組伏んとそる所にて互ひに秘術を爭ひける照井も聞ゆる兵者にて押返し〳〵猿も半分
毛をむしられ照井も半死半生にぞ成ふける霞の源太是を見て遁れ危きことゝ走り懸りて指通し
ける夫より勢子共を呼寄て將軍の御陣へ擔かせける將軍御悦喜限りなく誠ニ猿の古きハひゝと
云物之能献上に然るべしと山立にすけ附頓て皮を剥せたり既ふ其日も暮けれハ明る三日目ハ七ッ
森の大森を狩立ける斯る所に北の方より大木をならし小樹を蹴倒し駈來るハ如何來物と見て有
ハ壹丈計りの熊駈來る爰ニ又鳥海ノ源八と云者管鎗遣ひの名人之迎手ニ持て熊の月の輪を目懸
只一突と突けれハ熊ハ手を負大に怒つて源八か持たる鎗をかなくり捨源八をさん〳〵に掻掴み
手負熊と成ニけり數多の勢子足輕を腦して夥多敷見えにけり霞の源太是を見て腦されてハ叶ハ
しと透を伺ひ太刀を取今や遁しと待懸たり案に違ハず彼熊ハ源太を目懸只一拳と寄所を源太ハ
はられて叶ハしと透を伺ひ熊ふ飜りと打跨がり鎧通しとするりと抜熊の脊骨にくつと突立尻尾
をまつかと握り請鍔も通れと突通を壹丈熊のとなれハ其方此方の峯に駈上り此方の澤邊に駈來
り虛空無陣ニ駈廻るなれ共森隅ハ都一の馬の上手のとなれハ惡所難所の嫌ひなく攻をせんとゝ
乘たりけり一丈熊のとなれ共馬上の上手に責立られ兎有る木の根に胸を當大聲上てぞ死たりけ

り頓て森隅止目を刺し如何に勢子共是を將軍の御陣へ擔け畏りしは迚勢子足輕大勢立寄り如何に
方々熊と云物は死たる眞似をして多くの人を脳そと聞鹿忽に寄まへ合點せよと罵ひ〱に立寄
は折節北風烈しうして熊の稲毛そよに立勢子共是を見るよりも夫熊の死ぬぞと跡をも見ずして
迯ゐける源太是を見るよりも扨臆病な奴原かな死たる熊が恐敷や早疾將軍の御前に擔けと云け
れば勢子共はおかな〱に寄集り大勢にてから〱り頓て御前に持ゐける將軍御機嫌限りなく壯
丈熊とは是成りと宣ひて都への能獻上と山立に申付頓て皮を剝せたり其後御狩終れば此度忠節
の人々へ御賞被下ける高さは諸領賤は御褒美給はりける爰に又宮城郡七郎は家老に五郎と云者
あり八足切の猪を勢子共に擔かせ將軍の御前に出恐れ多く候へ共此猪は某が組留て候と品々高
名を申上ぐ霞源太是を見てヤア如何に五郎又者の分として御前近よ立寄は推參之そこを退き玉
へと呵りける五郎大に氣色を損し然らば又者高名は高名に成ぬかと申ける森隅聞て己れ誠に高
名ならば隨分取次申可其猪は我向ふの澤にて組留たる猪なるぞ五郎聞て證據は何ぞに候ぞ森隅
聞て己れか指成る賤敷者の翌日に出さんと思ひはこそ其猪の前歯を貳枚つゝ打折置し夫勢子共
改めよと有ければ畏て猪の向歯を見れば二枚つゝ無りける森隅は懐中より歯を取出し向歯に植
て見れば割符を合する如くなり五郎大に赤面し迯んとするを森隅透さず押へて扨々己れは徒ら者

諸軍陣中なられは主從共に蛇度死罪に行ふべき者なれ共是は目出度御狩の事なれは汝か主人七郎
は子細なく五郎は氣仙の大島へ流せと有り五郎をは御前よて高手小手に禁めて其身をそき斷て
罪科と成ゐける五郎が後ろ姿淺間敷かりける次第之其後御狩のと終れは七ッ森を立せ玉ひ大名
小名御供にて宮城郡澤音と云所よ歸陣をすへ平地に大釜を七ッそへ此度取れたる猪を煮て諸大
名へ御盃盞を被下ける人々こわ有難しと頻りに頂戴仕る是は扨置其頃奥州宮城郡に大円淵長者
と申て渠か水仕よ惡玉と云女有り其日は澤音の邊に根芹を摘に參りける彼惡玉は元は由有者の
子にてしか賤敷者の目には類る稀なる惡女とてそれ見にける田村將軍公の御目よは如何なる内
裏上﨟も是には及ばぬ風情に見ゐける將軍は幕の内より御覽して如何に森隅向ふの澤邊よ居目
能女ゟ根芹を摘て居たるゝ是へ召寄せ酌を取せよと御諚之森隅畏り澤邊を指て下りけり爰や彼
所を見て有るに一人も無りける能〱尋見て有ぎば此方の澤よ稀なる惡女根芹を摘て居たりけ
る森隅見て己れは異ゝ女成とか云ければ惡玉は畏り自己は此山陰の長者が水仕にてしか主人の
奉公隙なよて髮に櫛の齒入されはおどろを乱すゝ如くえ手足の爪たに取されば鷹鷲の如くえ去
ならゟ魔緣變化の物にはしはず驚き玉ふな殿人と馴々敷ぞ申ける森隅聞て夫は兎も有れ角も有
そなたの御諚之早疾なきよ歩めとあれば惡玉は承り自ら如きの賤女ゟ將軍の仰せ共覺へずしは

去ながら兎角仰せに随ひ申さんと森隅に打連てゆきは前に畏る将軍は機嫌限りなく誠に眉目能女ぞと悪玉に酌を取せは酒宴は花も降かと見えにける其後悪玉を禅奇よ三日三夜留れては酒宴こそは成されける其後御酒宴のは壽きも過ぬれは諸大名には暇下され悪玉にハ深く御名残を惜まれて黄金三拾枚美濃の上品三拾疋悪玉に下されける悪玉ハこは有難し去ながら自分如きの賤の女か箇様の賞を何かせん外に形見を給はれと将軍不便に思召し母上より給ハりたる神通の鏑矢を片手に取出し錦の袋に包ませ玉ひ悪玉に下されける悪玉ハ又ハ有難し将軍公の御形見是迄なりと押戴き早は暇を賜ハりて名残おしけよ悪玉ハ九門彌か館へおそハ帰りける其後将軍ハ霧の館へは帰陣有て早や其年も暮行て明る三月中半頃に成よけれハ都登りと聞えたり出羽奥州の諸大名ハは供仕り白川二所の関迄は門送りなし奉つれハ将軍御悦喜限りなく都を指て登らるゝ斯て帝都よは着あれハ直ちに内裏へ参内あり奥州の事共を残らず奏聞被成ける猿の皮と熊の皮を奉る龍顔甚た麗しく乱れ切たる出羽奥州を三年ヶ内よ取行ひ目出度上洛致すと奇特の至りと仰せられ日本の将軍に任せられこハ有難しと将軍ハ急ぎ退出仕る二條に入せ玉ひつゝ三日三夜のは祝儀ハ目出度かりける次第なり是ハ扨置き哀に哀れを止めしハ奥州の九門彌長者か水仕悪玉にて諸事の哀れを止めたり奉公の身の悲しさハ昼夜の隙もあらされハ余りのことの悲しさよ許

軍公より玉ハりし鏑矢を手に持てあなたの方と此方の空を打詠め懸し懐かし将軍公此山陰に坐在か扨てあの雲の下におハすかと明暮戀させ玉へしか今ハ悪玉懐胎と成にける斯て月日を経る程に月日に関守それらねハ早三年になりにける九門彌ハ女房を近付け扨又あの悪玉ハ懐胎に見えけるか悪玉箇様なる女に契る者か有べきか女房ハ此由を承りのに如何に妾が賤女ハ賤まぬ者よひへハ九十九向に八百八好と縦のい得ハ悪玉か様なる女にも相應の相手か有へきなり九門彌聞て夫ハ兎も有り角も有り惣して人の臨月ハ心經の文字の数二百七十四箇日よ究りたり悪玉ハ懐胎に成てより以來三年よ及べ共産の紐を解ぬなり是かふしきよいぞ實に忘れたり日外澤音へ根芹摘に参りし時二三日帰らぬと覚へたり夫それハ狐狼狢毫の業なるか又ハ山男の手に懸りて有へきぞや中々人間ハ生れまじ屋形の内にて産の紐を解するとハ穢らハし早や追出せと計りにて坂田より十八丁計り何方なる蘆野の中へ産家を立て悪玉計り追出す無慘なるかな悪玉ハ蘆野の産屋に入にけり竹の編戸や菅掻に居なから月を詠めんいとゝ思ひハ陸奥の栗栖山の物あんじ積る思ひハ猶は重き次第に月も重なれハ三年三月と申ハは産の紐を解く頃や今ぞ限りと悩るゝなれ共正八幡の守らせ給ふとなれハ安々とは産の紐を解き給ふ清水にて生出湯を参らする御子を取あけ見給へハ玉の様なる若君ぞ悪玉斜めに悦びて下着の衣に包みて能々労ハり奉り乳味を

含め今ハ早見るに付ても悪玉ハ說口とこそ哀れなり扨も〳〵果報少なき者ぞかし其方の父上と申ハ將軍公にて郡人の胎内を借せ給ふならバ若君誕生ましまさ迚數多の御乳や乳母を附添て蝶よ花よと爲すべきに夫に引替へ淺ましや賤き妾が胎内を借せ給ふゆへ蘆野の中の御誕生なら情なの憂世やと暫し涙に咽かへる斯る所へ九門彌か館より使者の參り如何に悪玉汝ぢ安產せしと聞く其子ハ惜む物ならず早疾捨て屋形に歸り奉公せよと有りければ夫ハ無慘なりと悪玉ハ口說とみそ哀きなり夫れ世の中に仕ましき物ハ身賣奉公ぞや扨も世にある人々ハ廿日一重と申迄產家の内に有ると聞く夫に引替へ自らハ未だ七夜も立さるに屋形に歸り奉公せよといふハ何事ぞあら邪見の九門彌と暫し悔ませ給へ共主人のとなればカなく泣く去ハ迚捨て歸らんと悪玉ハ蘆野の中を迷ひつゝ爰に此若捨へきや彼所へ若を置くならハ狐狼野干にほくせられん其所にも置れず彼所にも捨られじと蘆野の中を涙と共に迷へるに早日も西山に傾きいつも名殘ハ同じと左あれハ捨て歸らんと小松の元に立寄て上着の衣を敷皮となし口說とこそ哀れなり如何にくまん世無き共聞てたべ此母ハ能々守育てたくハ思へ共主人の仰せ是非もなしと暫し泪に暮居しが斯てハ果じと心を勵まし迚も角ても專方なし此に捨て歸らんと能人に拾はれて育ならバ末ハ目出たかるべきに如何なる人の手に渡りとふして育のそだゝぬやら二度と逢ふやら會ぬやら親子の

緣だに尽ぬなら何國が浦に育つ共又逢ふともあるならん名殘惜や此若を泣々彼所に捨置て立歸らんとし給ふに勞ハしや若君ハ乳房の別れを悲みてわつと泣出す哀れさに乳房を尋ぬる悲しやと又立歸り抱き揚げ若に乳房を含らせたり親子の別れ惜まれど叶ぬとなれば是迄なりと思ひ切り彼所に若を寐せ置て立歸らんとし給ふに南の方より紫雲たなびき忽ちに聲高く如何に悪玉其子を捨る者ならず夫れを捨る者ならば汝が爲に悪かりなん能に育つる物ならば末は目出度かるべきに我こそは肌の守の觀世音と光を放ちて飛び給ふ悪玉はてば有難く主命は背く共天命は背きがたしと有り去れば御告に任せんと悅びて若を抱きつゝ元の產屋に立歸り蝶よ花よと寵愛を是れハ扨置き九門彌夫婦ハ鹽釜の淵崎に立せ給ふ觀世音ハ靈驗あらたにましませハ是れへ參詣致すと夫婦打つれ參詣を最早下向と成しかハ長者申樣如何に我妻聞給へ女ハ高きも賤しきも皆同じ之縱令賤き女にても貴人に仕ゆる其時ハ玉の輿にも乗るとなり是れより悪玉か產屋に參り情を懸んと申ければ九門彌聞て穢らはしくハいへ共汝情を懸るなら我も立寄申さんと產屋へ原へと廻らるゝ彼所に至れハ柴の庵の編戶を叩き如何に悪玉九門彌か來るぞや爰を開けよと仰せけり悪玉ハ承り戶扉を開きてこれハ御主人樣にてハか狐狼野干山男などを出して斯の如き子が出來てハと指出す九門彌ハ驚き能若を設けたりいさ此方へと膝の上に抱き上げそくれの髮を撫

さすり女房此を見るよりもあら恨めしや妾の殿あなたハ十八自らハ十四の年よりも妹脊と成て早や四十年過れ共未た世繼の子ハあらぬ如何なる先の世の報ひか自らも此様なる者をバ設けてあるならハ數多の寶もいらぬ〻あら恨めしの我身やと暫し泪に咽ばるゝ長者是を聞よりも實に道理なり如何に惡玉ハ身始終を知る如く我ハ世繼も持ぬなり其子を我に給れよと惡玉ハ承り是ハ愚かの仰せかな自ら如きの持し子を御代繼にハ叶ふまじ長者ハ聞て否々夫ハ左ふあらず少しも苦しからず隨分此の九円彌が家督にそるとも差支へなし是非に呉よとありけれバ惡玉ハ今ハ兎そん屋舗の内ちに小家を立て一生あんらくに暮らさせん今日より以後ハ必らそ親と名乘ンさんと鹽釜明神の大誓文を立よとあり惡玉ハ承り是きハ愚かと思へ共主命なれバ力なく委細ハ承知仕ゝ九円彌左あらハ人の見ぬ内に片時も早く歸宅致さんと若君をバ惡玉に抱かせて是れも觀世音の御引合と悦ひ勇んで我家を指てそ歸りける

○惡玉御前の記

扨も其後九円彌ハ我家ふ歸りけれバ約束の如く俄に邸内ふ小家を立て惡玉ゟ奉公一生ゆるし金銀米穀を過分にそれ與へて小家に住居を致させける若君ハ九円彌が大切の代繼なればとて一門二家を寄集め吉日を撰み立元惡玉ハ熊野より出ける物なれバ熊野の熊を片取て勢熊と名付ける一年二年早や過て七才となりければ學文の爲に宮城郡に名も高き龍門山道雲寺にぞ登らせけるさしも名高き九円彌か代繼のとなれハ供人數多引具して御寺に至れハ住僧の御弟子となり能く學文怠らず十四歳になり給ふ頃しも今ハ八月十五日宮城郡の八幡村八幡宮の御祭禮〻やよさめ弓太郎ハ先年より山の寺の見子たりしが撰出してひへバ此度も山の寺より出そゝ其日に當りて道雲寺今日の弓太郎ハ離れふて勢熊てそ弓の上手にひへハ勢熊ならてハ叶ふまじ八幡ふ參り目出度弓太郎を仕れ勢熊ハ畏つて御請し流名長者の代繼裝束ハ人々勝ミ一層目立て花やかゝ見子共を引具して八幡の宮へと參らるゝ社内に至れハ水垢離すかさ淨身を潔め給ひて神前を拜しける惣て別當に對面有りて互ひふ式對一禮終り共後別當すける樣ハ今日の弓太郎ハ何方ふてひ、ぞ姓名を名乘れよ兒子共答へて今日の弓太郎ハ忝けなくも山の寺の學頭九円彌ゟ代繼勢熊殿とそすける別當大に腹を立ち何勢熊か弓太郎に來るとや九円彌か實の子そなた輕き者を増てや勢熊ハ九円彌ゟ子ふて子に非ず水仕女の惡玉か子なるぞや左樣の賤敷者を此庭の弓太郎とハ穢らはしや早速爰を立除よ跡清めよと以ての外に呵りける勢熊ハ數人の中にて別當に恥辱を與へられ憎き別當ゟ言れ只一撃に打割て兎ふも角にもなるへきと思へ共いや待て暫し我心短氣ハ損

の基ひなりと心て心を取直し唐土の韓信ハ市人の股をくゞり漢の高祖に仕へて四百余州の臣下となり去るに依て韓信の傳へ置れし事共を思ひ出し市人の股をくゞりて末にハ千人の肩を越ゆと承れハ勢熊も此所にて恥辱を取共終にハ千人の肩を越へて與んと心を静めけれ共數多の人に後ろゆび指れんとハ無念ゝと思つて九門彌か館へと歸らるゝこハ扨置き悪玉ハ其日ハ八月十五日名月のとなれハ月を詠めて終夜一人言して口説つゝ夫れ世の中に秦公の身程憂き物ハなし自ハ氏も系圖も九門彌抔にハ劣まれせし抑も自からの先祖と申せるハ熊野の權現天竺ハ摩迦陀國より日本へ渡らせ給ふ時御供申せし近江中將安形の拾七代の後胤に近江判官安形の三の姫ありしか先年丹後へ參詣の時盗賊共に行き逢て供の者共皆討れ甲斐なくも自らハ盗賊共に案内され元より美女の事なれハ爰にて遊女になせんと彼所にて賤き者の妻にせんと言れし故肌の守の観世音に深く祈誓を凝すれハ有難や類ひ稀れなる悪女となり今ハ此陸奥に迷ひて九門彌か水仕ありしか先年都の將軍公當國へ下らせ給ひし時將軍公の御目に叶ひ御盃盞を頂戴仕り剩さへ御通の鏑矢片手片身と給はりしが彼の鏑矢の徳によりて勢熊を設けしかとも是を九門彌に育て上られ親と云ひ子と名乘なと鹽釜明神の大誓文を立させられ親子の熱心切れ放れ難けれハ誠や我勢熊ハ今日ハ八幡の弓太郎と聞て有り若き者にてハ得ハ的を射損じなハ賤しき悪玉が子なるぞと譏

ろ指をさゝれん是れ我身の上の恥辱ゝ最早今日のやぶさめ刻限も過ぎつる頃で有りつらん戀し床しの我子やと暫し歎せ給ひける是を勢熊ハ小家の邊に立寄て一々此事を聞取られ戸羽をはとくと音つれて爰を頼むと云けれハ悪玉答へて誰やと問けれハいや苦しうハいず勢熊にハそ爰を明給へと云ひけれハ悪玉ハ驚き戸羽を開きこれハ如何に若君にてハりいざ先づ是れへ此方へと座敷へ請じ入れけれハ勢熊ハ悪玉の前に手を付て如何に母上樣某しが父上ハ何國にかいぞ姓名仰せ聞られよと云ひけれハ悪玉ハ承りこれハ若君にハ物に狂ハせ給ふかや但しハ狂氣し玉ふか九門彌樣御二方か若君の父母にていへハ自ら如きを母上抔とハ恐れあり若君ハ隨召し如何に母上深く包せ給ふなよ某しも八幡の別當に恥辱を受けたり其由ハ勢熊ハ九門彌が子にて子にあらず水仕女悪玉が子なるぞよ左樣な賤しき者を此庭の弓太郎とハ穢られしや疾く庭を立退よと別當に恥辱を與へられていゝ去るに依て別當か眉間を只一打に討倒て兎にも角にもなすべきと思ひしか何れにもせよ母上に承ハらんと只今是迄參りしか母上樣にハ御先祖の御事から一々口説せ給ふによりて委細ハ承知仕る深く包せ給ふなよ母上樣と申上く悪玉ハ至當の道理に詰られて今は名乘らんかと思ひしがいやまて暫し鹽釜の大誓文を立てたれハ何と若君ハ宣ふ共九門彌御二方こそ若君の父母ゝとて中々名乘る氣色ハ無りける若君今ハ力なくよし〳〵去は是より八幡へ參

り別當が眉間を只一擊の下に打割らん後にぞ恨み給ふなと駈出さんとする所を悪玉追駈け引止め如何に勢熊左程に思ひ切たるとあらば委細を名乘り申べし身か父上と申そは都將軍にて先年奥州國司に下らせ玉ひし時將軍公の御目に叶ひ御盃盞を頂戴し神通の鏑矢を賜はりて候其德によりて汝を設けしと一々次第を物語れば勢熊は悦びて偖は左樣に候其儀ならば父上より賜はりたる神通の形見の矢を出されよ悪玉は心得候と神通の矢を取出し如何に勢熊父の形見は是なりと指示せば若君は悦びて押戴き是さへあれば都へ登り父將軍へ對面し母上へも玉の輿を贈て下し申さん御暇申さん母上と直に小家を立出ければ悪玉は悦びて如何に勢熊よ都にて父に對面致しなば音信を早く知せてたべ迎ひの輿を待居るぞ更ばく〱と互ひに暇を告け別れ田村の里を既に出んと思ひしに鹽釜の明神は奥州一の宮に坐在ば社參せんと思ひ出し鹽釜を指て行く程に千賀の浦に至りければ潮を以て身を清め坂を登り神前に膝をつきぬ抑も此神と申奉るは内宮は地神の御神兩別宮は人皇十四代仲哀天皇第二の宮少しく子細あつて陸奥へ下り給ひ花節の里と云ふ所へ御出有りて夫より千賀の浦へ飛移らせ給ひて雨またらの牛をひき始め給ひつゝ七ツの釜を鑄させ給ひもたらせし御鹽を柏の葉に押包み雨またらの牛に附けさせ日本國中へふり渡を是れ鹽釜の明神之去るに依て此明神をば鹽留の太子共鹽筒王の孫とも又た猿田彦の系を繼せ給

へは猿田彦共拜むなり道祖神の血脉なれば道祖神共拜む之右宮左宮別宮と三社之東宮南宮荒たいさ是を合せて鹽釜六社の大明神と號し人間五常の御神之夫れば勢熊は神前に額つき都に在坐父將軍に逢ふ樣に導かせ給へと一心不乱に祈りて御坂を下向被成奏社の宮を伏拜み立出て見れ恥辱を取り八幡山稻の笹原風越て興正山の鐘の音哥には讀ど末の松山浪小佐次立ち石伏し石千引石摺干に見えぬ沖の井の野田の玉川ぞき出て流れを明す玉川や一夜は誰や寝具の大野朝臣恵美朝勝の立置きたる坪の碑を弓手に見て市川渡れば千鳥立つ南宮明神此神は此花咲や姫豊玉姫の跡を垂させ給へつゝ色の御前の御社守らせ給へと伏拜み其方の方は先年父將軍御所を立させ給へし鹽の講とはあれとかや見るに付ても懷かしや牛頭天皇の御社守らせ給へと伏拜み奥州の奥の細道獸鷲を打渡り元の松山東光寺十二の藥師は慈覺大師の御建立十符の菅菰切弱ヶ淵冠川を打渡り玉田横野を馬手に見て躑躅ある里は是とかや本原の宿早過て此宮城野に咲萩は露に乱れて野に鹽竈梅ヶ岡は是とかや白山天王十八の尼寺は聖德太子の御建立木の下藥師を伏拜み成瀬川をも打越て見上て通る茂ヶ崎や名取川をも越給へ熊野は三社大權現名取老女の御建立守らせ給へと伏拜み那知の御山を馬手に見て今熊野權現を伏拜み鹽いさゝねと鹽手山長の旅路のとなれと雨は降ねど笠島や道祖神を伏拜み早阿武隈川を弓手に見て鐙摺石峠坂伊達の大木戸早過て信

夫の里に着給ひて一首を詠み置れたり

　　歸りみん何時しり爰に丸山や信夫もちずる知人そまれ

次を何國と問せ給へハ若宮貳本松竹矢吹爰田の關を越へ太田川や小田川や身の行末ハ何となるらん白川の二ヶ所の關をも越給へ境の明神を伏拜みあくつ絹川坂東太郎戸根川や此武藏野に成りけれハ指もふ廣き原なれハ月の入べき山もなし相模川をも越給ひて藤澤に着にける大磯小磯早過て湯元の地藏を伏拜み彼浦島か明て口惜き箱根山戀し床しの父將軍を夢ふ三島の神社詣れ激しき藤川や只何事も油井蒲原の宿を過き忠義の旅も駿河みるあれ三保か崎〳〵月見かた富士の雪消なん跡の恥かしさあれが春の明ほのと今一入の名慰み蹴上て通る鞠子宿松にのらまる藤枝や四方ふ海ハ無けれ共嶋田の娘きつれさす雲井流るゝ大井川神ゟ祈るハ金谷の宿小夜の中山清源寺無間の鏡かあるとかや此鏡を聞に付ても恐敷や人に情けハ掛川や大天龍小天龍通り爰ふ遠江さゝんさ謠ふ濱松の濱名の明神伏拜み賢のならハ花咲なんぐん瀬川荒し小嵐醒めかいや旅り番場を早過て長の旅路のとなれは鏡の宿も恥りしや裙に玉ちる篠原や瀬田の唐橋打渡り近江八景多けれど中に取ても石山や大津三井寺志賀唐崎の一ッ松宿の名殘や名所の名殘數重なれハ漸々と今ハ五條の市街ふみそれ着にけり其後若君ハ世の風聞を伺ふふ父將軍公二條堀川ふ御所

を立させ給ふ由に承る何卒父の御縁を求めんと毎日〳〵堀川の御所へと通れるゝ折節將軍の屋形にてハ外樣の侍士寄集め蹴鞠の會とぞ聞えたりとふ〳〵はりやはりやとふはりと蹴る鞠も將軍公の蹴させ給ふ御鞠ハいつしかそれてやらひを出て築地を乘越へ堀を越へ門の外へと出よける若君此樣を御覽して小踊りし鞠を蹴返し給へバ門を乘越へ築地を飛びやらひの内へと入よける將軍是を御覽して偖もふしきや此鞠ハそれて行べき筈ハなしそれたる鞠ハ又受へ二度戻るいとれあし急ぎ門外を見て參れと霞野源太へ仰せける森隅ハ畏り候と御前を頓て罷出て門外へ出て見るに此方の方に旅窶れふ窶れたる冠者が一人四方を詠めて居たるふぞ森隅是れを見て如何ふ旅の冠者國ハ何國て候ぞ若君ハ聞召し參候奧州者と答へたり森隅聞て奧州者にて候ハゞ伊勢參宮ふて候か又ハ都見物に來る者か若君ハ聞召し參宮ふても候ハす都見物にても候ハす奉公の望みにて是迄參り候恐れあから將軍公へ申上て給されかしと森隅心得候と急ぎ御前へ出て右の次第を申上く將軍此由を聞召し奧州者と聞からは懷かしや此方へ召と御諚ゝ森隅は畏り又門外へ走出て若君を伴ひて將軍の御前へ出つれは將軍公御覽して是れ如何に陸奧の冠者汝は奧州と聞けるが奧州ハ何國の邊と仰せける參候鹽釜の邊と答へける將軍御覽して扨又奉公望みとて遙々是迄來るとや出羽奧州關八州ハ諸大名も多かるへきふ何とて夫ふ仕へす是迄來るぞや若君聞

召し參候出羽奧州關八州大小名ハ多けれど某しが仕ふへき主人ハ壹人として候ハす恐れながらも主人壹人給人壹人と申あく又諸軍御覽して其儀隨分承知せり其儀なら召仕つても遣さん給人にもさま〳〵の得手があり汝らハ武藝ハ得手なるか若君は聞召し參候東より奉公が望とて是迄參る某の一方斗て候ハす第一武藝に於てハ荒馬に乘て強弓を引き第二文學ハ孔子の敎へ給ふ書籍なら何れ成り共講釋仕て候之第三遊藝とすてハ哥を詠じ詩を作り連歌俳偕碁双六鞠の會何れ成共究めて候之諸軍此由を聞召し扨も汝ハ武藝學文遊藝とも殘らぞ學ひて有けるな抑も侍士と申そるハ剛氣計りて叶はぬ之少しく柔さも無てハ叶いねハ佛書ハ心得て居るか若君ハ聞召し參候某しも山の寺にて學文仕候之ハ一切經も兩度引出して候之其儀なら力の程ハと仰せける若君ハ聞召し參候力ハ未だ試し申さぬ之夫に試させ見よとの御諚之二人持の碁盤に白糸緘しの鎧二輛重ねて打乘せて是を以て奧の冠者に試せと有りけるハ若君完爾と打笑ひ都人とて優しさよ出羽奧州と申ハ夷之その惠比須の住家にて候へハ箇樣の物ハ四ッ五ッの童すが到ッ手遊ふ仕る箇樣の物ハ些し手輕ふ候ぞ將軍惜しと思召し如何に森隅汝ち其鎧を着し碁盤の上に跨かりて持れて見よと有りけれハ畏りて森隅ハ白糸緘しの大鎧二輛を重ねてさつくと着て白柄の長刀杖に突き碁盤の上にずつくと立ちャア如何に奧の冠者ちと慮外ながら將軍よりの御諚之試して見よと

云ひけれハ若君ハ聞召し若し左様にてもいハヽ冠者か手頃にていハんとじつと寄り碁盤の四隅をつかと取り廣縁通りをひら〳〵と馳廻り元の所に立歸り若君思ふ様碁盤の上に立たる男子猶さも憎し恥を搔せて呉んと思召し如何に都の殿よ某し旅の勞れ故若し持損しるともありつらん必ず御油斷成されまじと云ふより早く碁盤を逆さに投ふけり森隅ハ氣早き男子にて翻りと列込り碁盤の裏に立たりけり將軍始め一座の人々是を見て持も持たる奥の冠者立も立たる森隅と暫し鳴りハ靜らぞ將軍ハ倩々御覽して扨又汝ハ世の常ならず武藝學文佛習遊藝力量迄人よ勝れて見へけるり汝程の兵者か貧しき君に仕れてハ嘸や無念に思ふらん近習に仕へ得さそべしと御近習廻りに仰せらる互ひに親子と知りなから將軍の御身持又ハ若君の御慎みにて奉公大切に勤めける親子の緣の厚き故將軍公の御氣に叶ひ半年計り相勤むるも胸の思ひを隠されて空しく月日を送りける或時若君ハ御前に罷出て如何に我君樣某しには御暇下されたしとやかく將軍是を聞召し偖又汝ち奉公を望みよて登りたるにあらずや然るを今に至り暇の願ひ不審なりと宣まへハ若君ハ參い某ハ東へ母を壹人殘置きてい之某し都へ相登り給人に取付し物やら取付ぬ物やらと蔭や案じ暮し給ふらん一先奥州へ罷り下り母に此事を物語りて悦ばせ其後又も都へ相登り御奉公仕らんせとやかく將軍此由を聞召れ誠に汝ハ親孝行忠義の者なるぞ其儀なら暇を取せとて母よ

對面して后に重ねて奉公を仕ると畏りいと御前を罷立ち我ぞ半年計り都に有りなから都を一見仕らぞ東へ下り土產の咄し更よなし今より都を一見せんと森隅に打向ひ某ハ都一見に參る之明日歸りやさんと其日の午の刻に出て一條より二條登る丁に下る丁祇園淸水加茂春日男山にハ叡山鞍馬洛中洛外殘りなく一見して明る日の申の下刻よ屋形に歸りて森隅に箇樣〳〵と語りける森隅大に驚ろき將軍へ右の次第を箇樣〳〵とやかく將軍公聞召し何國の邊を見たるぞや參い尋常の者ハ五日十日にも思ひ寄さる所をハ一夜一日に見て參るとハ中々凡夫の業ならず出羽奥州とやハ夷地近へことなれハ剛氣我慢の者か將軍公の武勇を押へんか爲に斯様の者か來るかも知れず君ハ思案在て早く此冠者を討給へ將軍ハ聞召し其冠者を討たんと思ひなハ數多の人を損すへし其儀なら鬼鹿毛の餌食にせんより外ハいまじ是れ如何に奥の冠者よ汝ハ荒馬に乘て見せいへ一馬場所望と仰せ之若君承り委細承知仕り如何に森隅御馬屋へ案内を願ふなり森隅心得いと御馬屋を指て伴ひたり鬼鹿毛馬屋とやすハ七八間り其內ハ楠の大木を以て大盤石に堅め天井にハ大石古樹を山と積み鎖を以て四方へ繋き置れたり森隅ハ大戶の閂ぬきを押はさ荒馬ハ是也と若君を馬屋の中に押入て屋形にてそれ歸りける若君ハ馬屋の體を見て有れハ常に死罪の者を喰すと見得て四方の角にハ死骸山を爲し鬼鹿毛ハ若君を見て常に給はる罪人と心得て眼を瞋らし前り

き打て飛懸らんとする所を若君ハ少も騒かず塵を拂つては身を消め如何に鬼鹿毛汝生ある物ならは我云ふ事を愼と聞け馬ハ馬頭觀世音の深く惜ませ給ふ之牛は大日如來の惜ませ給ふ之夫れ天竺釋羅僧國の猿田皇父母敬養の其爲に山に行く然るに虎は餌に飢て玉を喰はんとす、しは大王やは覧し如何に虎我に片時の暇を取せよ我父母に食を與へ其後汝に喰はれん佛提信道成佛と唱へ玉へは虎ハ即坐に成佛致す之汝我に隨ふ物ならハ富士の裾野に七塔加羅に光堂を建立し馬頭觀世音と祝ひ立て吳ん如何に〳〵と詰寄り給へハ流石の鬼鹿毛一重の膝を八重に折り首を領垂れ耳をたれ涙を流し居たりしハ物を云さる計り之若君ハ大に悅び出雲拵の白磨き引手あふみの深かりしを馬にかんじてうませつゝ金覆輪の鞍置て小簾紋の手綱をハ一よりよつて馬の前輪にさつと懸け大戸を開て引出を常に馬屋を出しとなけれハかん强くして嘶なく聲恰も雷の如く之町内の人々ハ是を聞若も其若君鬼鹿毛を乘損したる時ハ押る人ハ四方にあらじ在それは此町内へ駈け來るは必定あり然る時には町內の人種尽果ん如何にせんと騒ぎ立生たる心地ハ無りけり去れハにや將軍公西八條櫻の馬場へ矢倉を高く揚けさせて鬼鹿毛の賓馬を御覧有り若君ハ鬼鹿毛を櫻が馬場へと引出そ既に乘んと仕給ひしか否まて斯程の此名馬を一度娶めて乘んづと扨々天晴れの御馬之鹿合骨の四つ目節大唐竹を根引にし碁盤に依り立たる如く造れ名馬ないとそ

いろに御娶め遊ハされ無禮御免と馬引寄せゆらりと乘り先つ一番に地道を乘り二番よとゝろ三番に駈を乘り鐙隠れに戻り詰め二三度四五度乘たりける霞野源太是を見て適れ上手の乘様かな其儀なら碁盤を乘廻し白樫の八人持の碁盤を櫻ヶ馬場へと運ひける碁盤乘りハ若君心元なく思へ共乘れんと云ふハ卑怯之少ハ心得ひと馬を碁盤に乘上たり先壹番にハ地道二番にとゝろ三番にハ三百六拾一の目を一々殘さす乘たりける森隅見て都て曲馬と云ふ物ハ梯子を乘り第一之是を乘れとそナける若君委細承知と名馬件の梯子を首尾よふ參れと云ふ儘に强馬には强く手綱をういくり捨鞭打て駈出そ元より名馬のとなきハ十二の梯子をくせらり〳〵と乘上たり共方の築地此方の塀大塀小塀門も築地も飛越へ刎越へ跳り越へ馬か勇むと見ゆけるがは殿の上へ乘上けたり屋根を下りに逆落し箇様の惡所ハ長乘り無益と十二の梯子を乘下し急き馬より飛て下り謹んて畏り扨々君ハ能き名馬を持せ給ふ之些うんが過き口强にてひ得共乘心能きは馬にひ去なりら名馬を持せ給へ共乘手壹人に馬壹頭にてひとナあく將軍は機嫌限りなく誠に乘たる奥の冠者直よ馬屋に引て行け畏りひと元の馬屋へ引入る鎖を以て堅く留め大戸に門ぬきを確乎おろし扉形を指て歸らるゝ此若君の馬術ハ凡夫の業とハ見えさりける將軍公霞野源太を召しあの若を鬼鹿毛の餌食にせんと思ひしか即て馬か隨ふ之サア此上は我れ矢先よ懸けんより外ハひハじ鬼鹿

毛の貴馬大儀の褒美とて早や疾く膳部を取すべし急くと有ければ畏て森隅は早速膳部を申付すア奥の冠者君より御料理給はりたり夫にて膳部を拜味致よと有ければ若君は疾くに悟らせ給へ共左あらぬ体にて誠に冥加に叶ひ有難き仕合とておめも臆せず食するを將軍御覧し仕濟したりと五人張に十五束切て放ては過またぞ若君の胸板にあひなく成て見えけるか若君は少しも騒かず食そる箸にて確かと挾み膳の角へと直し置く將軍驚き二の矢を番へ上られ首下られ矢坪と狙ひを固めて放つ矢は若君の肝のたばねに危く成て見へけるり又も箸にて確かと請留め四方を急度見廻し某にてあらずんば肝のたばねを貫ぬかれん者も危きとと左有ぬ躰にて扣へたり凡夫業とは見えざりける將軍は今に始めぬとあれと大に驚かせ給ひ合の障子をさらりと明け如何にや奥の冠者御身は只人にてはよもあらじ汝ぢ鬼鹿毛の餌食にせんと思へ共却て鬼鹿毛を踏はし我又矢先に懸んとて一度ならず二の矢を番へて有けれと我の矢先にも懸りえず我ゝ矢先に懸らぬ物は天か下には覺えなし迚ものとに奥の冠者姓名を明されよ若君は畏り随分名乘申さんか將軍公の御家は何代傳はりしぞ去れば我先祖と申は星の中より出生有し五條中將年春我は又三國ヶ浦蟹井か池龍差王と云へる大蛇の胎内に三年三月宿り出生致せし我身は則ち二代なりと仰せ討る若君聞召され其儀ならば將軍の御家は三代續くと思召せ將軍公奥州へ國司に下らせ給ひし

時奥州の悪玉に御馴染の悪玉か胎内に御胤を宿し三年三月を經て出生致せしは某之將軍公聞召し扨は我子にしか今迄は箇様のことは知ずして鬼鹿毛の餌にせんと計つて其後は我矢先に懸んと一度ならず二度までも思ひしに神佛是を憐み給ひ今迄勝負の付ざりしは偏へに弓矢八幡の御引合せ親子の縁厚き故ならん夫世の中に將軍程の名將か我子の手前も面目なしと宣ふて鬼も欺く將軍も悦喜泪に咽はるゝ是は扨置外樣の侍士共是を見て今迄は奥の冠者と思ひしか扨は君の御胤なるり道理ちや是迄の業は實にも適れ稀きやと敬ひ恐れて平伏す將軍は御覧して去は参内致さんと時の裝束改めて直に内裏へ上らるゝ御階近ふ畏り始終残らず奏問そ帝御簾巻揚させ將軍親子を叡覧あつて一代ならず二代三代相續き箇様の稀なる者出ると我日本山海の悪魔降伏の爲ならん父にも増たる器量之其出生は奥州塩釜の過田村の里と有るからは早速元服致そべし田村將軍年八に任せられ猶怠らす天下の政道仕きとの宣旨なり畏りしと將軍御親子は玉體を三度拜されて内裏を退出成され頓て二條の御所に被歸ければ御約束の如く奥州悪玉御前の御方へ玉の輿を下しける悪玉御前は御悦ひ限り無く去は都へ登らんと玉の輿にそ召れ給へは昨日迄も今日迄も世にも見悪き顔形ち御代に出させ給ふとて如何なる内裏上臈も是には如何て増るへき九門彌夫婦は大に悦ひ去は御供申さんと玉の御輿の左右に立ち浮世に随ふ習ひとて主が下人下人

ヶ主となりけれハ淵ヶ瀬となる世の習ひ悦び勇んて都を指て御供す頓て都に着けれハ二條の御所へと入給ふ悪玉御前ハ今日こそ父將軍と田村將軍に再度り廻會ひ給へハ暫し積る御物語り御悦びハ限り無し其後九円彌夫婦を田村將軍の御前へ召れ如何に九円彌汝ハ我を育て與し其恩ハ誠の親より重きぞや此上ハ奥州にて三萬丁永代に判を給はり又九円彌か女房にハ悪玉御前より肌の守の觀世音並びに辨才天を給はりける九円彌夫婦ハ有難し／＼と早御殿を給はりて花の都を立出て遙々と陸奥の國を指て下らるヿに程なく奥州に成りけれハ肌の守の觀世音を直に石名坂の圓福寺へ奉納を依て圓福寺の本尊ハ悪玉の守り本尊正觀世音にて渡らせ給ふ之末世の衆生濟度あり並びに梅ヶ岡密祥院の辨才天ハ是れ九円彌の御建立にて靈験著るし共後悪玉御前の產家の跡を三尺土を取て流しける其裾野を赤沼とゆてかりやすとゆ染草の出る所は此時よりの由來之扨又八幡の別當ハ科無きも若君に惡言したる罪として耳鼻をそひて江の嶋へそ流されたり九円彌夫婦ハ奥州に於て三萬丁給ハり再度の花を咲せけり扨又田村將軍ハ悪玉御前の守り本尊十一面觀世音を直に都の清水に渉堂建立ありて音羽山清水寺と額を上け今が世迄も清水寺の觀世音ハ田村將軍の御建立と世の人々知れり時に大同二年あり

○立烏帽子記

夫れ我朝ハ神國にして度々惡魔ハ粧化なそといへ共萬里の外に切拂ふ是神國の有難さ爰に都の音羽山清水寺を御建立坐在田村大明神並びに奥州野の嶽富山牧山大竹四ヶ所の觀世音勢州鈴鹿大明神の由來を委敷尋ね奉るに人皇五十代桓武天皇と申奉る頃とかや天下の武將をハ田村將軍年人とて御年拾四歳にて天下の政道を執行ひ玉ふ之扨又御家の郎等にハ霞野忠太盛春とて文武兼備の勇士あり君内にハ五常を本として外にハ政道を正敷なし給ふ是れ聖明なる賢君とて仰りぬ者てそなかりける去共爰に一つの大變出來ぬ故を尋るに其頃勢州鈴鹿山よ天竺大六天の魔王朱島王の一人娘に立烏帽子とゆ鬼女三年以前に天下り奥州磐井郡達谷ヶ岩屋を住家となして大竹丸と云る鬼神と夫婦になり日本の人種を取尽さんと文を以て約し時節を待居間に世人の賑ふ付たる金銀も車に積たる粟穀も藏に貯ハへる寶物も皆雪霜の朝日の當るか如く消失せけり近國の僧侶等は只事ならすと都へ注進そると櫛の齒を挽か如くに帝大に驚かせ給ひ早や疾く天文學者を召せとの宣旨之勅命よ隨ひ博士は内裏を指て上らるヿに帝よりの倫言にて箇條／＼の次第其吉凶を占ふへしと勅諚之儒者は宣旨を蒙りて要集暦引合せ暫し考へ横手を打ちあら恐敷や大天朱島王の一人娘に立烏帽子と云へる女伊勢の鈴鹿山に住家をなし日本の人種を取尽し神國を魔國にせんと計る之急ぎ討手を指向られて然るべしと奏しける帝大に驚かせ給ひ公卿大臣を召

れ此儀如何せんと勅諚あり月卿雲客ハ評議にも及はそ田村將軍年人は代々變化退治の家なれバ是こそ宜しかるらん尤も武將にハえバ年入てそ然るへしと奏しける帝叡聞坐在て夫れ年人を召との宣旨なり頓て使者を立給ふ將軍何事やらんと時の裝束を改めて參內成されけるハ階近く畏り帝叡覽坐在て年人なるか珍らしや汝を召と別義にあらず此度伊勢の國鈴鹿山に鬼神天下り我日本に雜化なそ急き彼地に馳せ向ひ退治せよとの宣旨ゝ去るに依て二萬余騎を下られハ簾ハさつと下りける將軍ハ畏り二條へ歸らせ玉へける霞野忠太を召れ個樣〳〵の次第ゝ此上ハ只信心にしくハなし總て日本六十余州大小の神祇を祈らせ給ひ別て淸水寺の正觀世音に深く御祈誓在て都を急き御出馬あり伊勢の國鈴鹿山へと登られ林の下に陣屋を懸け笹原草むら石の廻りに至る迄廿日余り尋ぬれど變化の住家ハ見えさりけれハ將軍大に立腹有り是れは田村か智略を引見ん爲めに事なきに追討の宣旨ありしか但しは鬼神か恐れて彼所を逃去しか我ハ此山に止らん人々ハ國々へ歸られよ我命の有ん限りハ變化を尋ね探し出會たる其時ハ又々一札下そへし其時こそハ向ふべしと御暇を給はれハ辭そる者なく人々ハ國を指て歸宅致せしと將軍ハ斯る深山に分入て木の根に取付き足爪立て笹原草原殘り無く去年も今年も亦來る年も尋ね廻らせ玉へ共變化の姿ハ見えさりける將軍思召そ樣鬼神は恐れて逃去しそ何にもせよ我れ觀世音を急き祈らはやと

思召し鈴鹿山の絶頂に登り皇城に向て足爪立て合掌し玉ふ城の鎭守には稻荷祇園に加茂春日八幡貴船男山を別て祈らせ給ふには淸水寺の觀世音變化の姿を見せしめ給へ鬼神の躰たにも無ならは帝より田村か智畧を引見ん爲と覺へたり某か過ちあらは立所に命を召玉へと三日三夜神慮を深く祈られハ目を開きハ思案あれは此年月か其間た尋ね廻らせ玉へは手をも懸ぬ草木もなく夏は岩漉る水に咽を潤はし冬ハ雪踏散し尋ね廻りし山なれハ足を立ぬ所もなし去共辰巳に當りて未見もやらぬ小笹原あり將軍公不思儀に思召され彼の笹原に分入て見玉へハ猫の通路やとの細道あり將軍猶も道を傳ひて見玉へハ不思儀や大門有りて八ッ棟作りに檜わた葺の巍々たる殿の見へにける扨も怪しと其所に入て見て有れハ庭にハ金銀の眞砂を敷て龍宮世界も斯や有らんと既に入んと爲けるか否待暫し姿を隱して入らんずと霞の法を結びて屋形の庭の築山や樹木の陰に身を密め段々奥を覘ひけるに三十計りの女房達萬句の連歌と見えにけるそこを打過き見玉へハ廿歳計りの女房達琵琶琴和琴三味線や笙篳篥羯鼓鉦皷に笛大鼓七句の調べの祉ひにて樂を諷ふて面白く流石に猛き將軍も只恍惚と呆れ玉ふいや隱麗ハ耳に觸たハ此儀ならんと其所を打過ぎ見玉へは二八計りの女房達六七人居揃ひて紫硯に墨を摺流し筆を染め色紙短冊哥誹諧文に戀路の色事を千々に案する其風情如何なる內裏上﨟も及ハぬ躰とそ見えにける將軍公浮れて叶ハ

じと叟も打過きは覽在けれハ一段高き殿有り椽先にハ金銀眞珠金のよふらく下られて吹き來る風にさそはるゝ心を言葉も述られす庭の躰を見て有れは四季の躰をは飾らるゝ先東は春と見えて鶯宿梅や白梅や梅ハ百梅納朱梅あの赤梅八ッ房や萬作鶴題岩梅楹引渡る春霞次に櫻を植られてあやう雲櫻や二尾櫻鹽釜櫻や家子櫻虎の尾櫻不買櫻や口紅櫻大さん木一重山吹八重山吹峰の嵐に吹つれてゑはし櫻も植へられたり松竹梅を植替へて又此方を見て有れハ夏の躰泉水築山寶珠蓬萊榮壽山とて三ッの島をぞ飾らるゝ島と陸との道路に玉の反橋懸させて橋の下にハ唐男我女のうつ魚船浦島太郎が釣の船五色の糸にてからくらせ淨樂我常の風吹けバ汀に寄ると暫しハ夏の躰とて面白や一ッの島にハ立ち石伏し石流れ石何を恨んて隔て石貸よ我戀ハ〳〵操干よ見えぬ沖の石君ならハ千代も變らで袖留め石綱留め石に戀衣貸にも陸奥幾代の數や四ッの石一ッの石よハ燈火在り是を遙に見渡せバ夏ならハ螢火の光と疑はれ其躰いと面白し次ハ秋と見えて關留め流るゝ天の川軒にあやくあゆの往古も戀ふハ朽ぬ七夕の歌にハ詠かと年毎に香ハすれ共星の夕粧る夜の數ハ少なかりける次第こ月見の躰の面白し摘枳唐梢皮紅葉小菊を植更て其次てそは冬の躰物淋敷そ打見えて姫小松の其陰に七曲呉竹植られける其下に白き龜ゥ伏よける冬の景とて暫し時をそ移されたり將軍座敷を見給ひて障子を押開けバ白檀磨きの小金星伯毫植に

香を焚き其香ハ何々そ蘭麝浮船寶香伽羅よ眞盤沈香數多の香を焚きける香の薫りハ上﨟の袖や袂に止めしハ極樂淨土も斯や有んと暫し見取れて立給ふ將軍心に思ふ樣彌も奥を覗へは七重障子に八重きてふ九重の簾の内是を誠の立烏帽子と打見へて年の頃は二八計りの上﨟りほふ〳〵眉に薄化粧非翠のかんさしくろふして貪ふ春あらは柳の糸の春風にそよと靡ける其風情玉を欺むく顔色に猶も見返し給ふに迺れ奇代の上﨟やと流石に猛き將軍も暫し見取れて扣へたり良有て弓手馬手をは覽有りけれは弓手よは琴三味線數多の双紙を飾らるゝ馬手には劔を三振立られたり將軍今ゝ最期と思召しそばや丸に御手を懸させ玉ひしか扨も敵よ成るならは剛氣我慢の鬼神あらは然るべきとなるに女を敵に持とは何事そ中よ立寄り騎はせんと思召されしゥ一天子の宣旨を蒙る身て心乱てて叶はじと二尺七すのそはや丸の鞘を外して障子越しに投給へは女は莞爾と打笑ひ大通連の鞘を外し投掛る將軍あんぢやく丸の鞘を外して投かけれハ女ハ呵々と打笑ひ小通連の鞘を外して投懸る田村のそはや丸あんぢやく丸ハ小鳥と成て飛入れは女の劔は鷹と成て追出す田村の劔は火烟と成て燃入れハ女の劔は水と成てあめしける天よ登り地ゑ下り爭そひ戰ひける將軍今は組ての勝負と思召し小鷹の法を身ゑ纒ひ座敷ゑ飜りと飛入り玉へは女の姿は閃りと消て失せにける將軍今ハ力無く只忙然と立給ふ時に女の姿顯出て如何ゑ將軍公先に劔

を鞘に納め給へ自も劔を鞘に納むへし去なから君ハそはや丸こんじやく丸の二振之自らハ大通連小通連是か懸けおふ其内に跡に殘る名劔を投懸る物ならハ君の御首ハ自らが物なれ共御身にハ観世音を念じ玉ふ故御姿一目拝み申より戀の思ひに何と無く心も乱れ悪心和らぎ善心に基ひて候そ自らハ最前より御心を能々悟りて候そ敵と是迄發向ハ剛氣我慢の者なるかと思ひの外女を敵と向ひしハ何事そ中に馴れ親しまんと思召され候へ共帝の宣旨を重んして斯ハ計らひ給ふ之其御心底忝けなし自らハ忍居候へ共神國の有難さに今又お目に懸りし之一目拝し給ふより思ひの煙り立登り君ならて誰にか契り結ふへし奥州切山に住家をなせ大竹丸と夫婦になり日本の人種を取尽さんと文章を三度送りて候え共未た返事の候ハす是こそ君の御仕合せと思召せ居坐先是へ此方へと近寄ければ諸軍も今ハ心も打解て淵ハ瀬と成る世の習ひ月日ハ替らせ給ふ共爭て心ハ變らしと御手を取せ給ひつゝ一間に入れハ女房達銚子土器取出し御装束を改めて三々九度の御酒宴ハ下紐解ひての手枕に二世と誓ひを契りける是と申も將軍ハ観世音の御利益て和國の悪魔を平けさせん其爲めに斯くハ契らせ給ひける立烏子ハ悪心を去り善心に翻り茲の悪魔を御退治有りての將軍の御智略適れ譽れの賢君なり

其後將軍御夫婦の人々ハ余り淋敷徒然に琵琶を引せ哥を詠じ詩を作り愛を増て幾千代懸て御契

まあれバ立烏帽子ハ早や懐胎となり給ふ七月八月も早過て九月苦み當る十月となれハ御産の紐を解給ふ御子を取上見給へハ玉の樣なる姫君之則ち御名ハ小林姫と號け參らせて御乳母を數多付け能々傅養育なされける昨日今日とハ申せ共月日に關守あらされハ小林姫は武才の秋の頃將軍公ハ南表へ出させ給ひ四方を詠めて在しまそ二ッ連たる雁のねか都の方へ飛て引く遙に是をご覧して御心に思ふ樣鳥類たにも其時節を忘れずして秋ハ古郷へ歸る之夫に反し我れ只一人六年余り魔女と夫婦の契りを込め骨肉を分ちし姫を持つ身ハ何事ぞ都にて田村將軍ハ變化の其爲に世に無き者と思ふらん左ある時は和國が魔國と成るへしと上下の僧侶鎮まらず來る八月五日にハ必す上洛致せへし其折に内裏にて彼女を討せんと神通の法を以て雁を霞に止め置き文に細々と認められ投上け給へハ雁りねか中にて是を受取て羽かへの下にかい込て都の方へ飛て行く斯て都に達して紫宸殿と清凉殿の合の御庭に落しける折節公卿大臣參内有て彼の文を拾ひ上させ讀せ給ふに年入よまの文なれは扨々田村ハ此世に無き者と思ひしに未だ此世に有りけるとて來る八月五日にハ魔女をつれ參内し内裏にて軍兵共に討せんと細々と書て送られたり此事を帝へ奏し奉るに帝御感甚淺からず田村ハ魔女を伴ひ來るの目出度さよ去ハ軍兵に事の次第を觸られけれバ一原松岡を始めとして一萬余騎を用意して八月五日を今や遲しと待居たり是ハ扨置き

爰に是れを止めしは田村公にて候都へは魔女をつれ參內し軍兵共に討せんと奏聞致し候へど又此年月の契りそは互ひに見えず見へられつ比翼連理の睦言は何れの世にか忘るべき八月五日も程近し兎やせん角や有らんと衣被きて伏給ふ立烏帽子は見給へて御枕元に立添て何とて寢らせ玉ふぞや將軍此由を聞召され古鄕のことを思ほれて片時は微睡候ぞ來る八月五日には上洛致さん其節は御身も伴ひて參內と奏聞して候へど神佛を拜み給へと仰せける鈴鹿は是を聞よりも兩眼に泪を浮べこは恨しの我君よ骨內分し小林姫の候へと又も自らことを魔女や惡鬼と思し召れ給ふかや過し頃雲井を雁か飛行しを君は神通にて止め置き御文認め都に登らせし依り都にては來る五日に田村が魔女を伴ひての參內を今や遲しと待居たり自らは其軍兵抔には討るゝ身にて余もあらず殊に自らは梵天王の生れにて諸神靈佛拜し居り又日本の王城を踏み靈佛信心をする身か容易く討き候まじ去れとも君は妹背の語らひを忘れ玉はぞ自らを失はんことを愁ひさせ玉ふの嬉さよ武士は僞り無きを元となす早や疾く上洛有へしと田村公の御手を取り一間に移し奉る時の裝束改て高輪車とて神通の御車に召れ雲井遙に登らるゝ三時計りにて內裏へと着にけり愈々參內有り右の次第を奏聞有れは帝叡感在て夫にとの御諚にて田村夫婦を御階近く召れ御簾高く卷揚させ叡覽あり諸家北面の武士に至る迄我も〳〵と御出坐有り田村は觀世音の再來日本無双

の賢美之立烏帽子ハ七千余たんの其姿如何ある内裏上﨟も及はぬ躰とぞ見へにけり帝よりの宣旨には如何に年人汝世に無き者と思ひしに參内すると神妙之扨又立烏帽子汝だ女の分として神國を魔國になさんと計るハ何事ぞや鈴鹿ハ承り仰せを陳ぞるとならす魔國に爲さんと一旦は天下りてはゐ得と年人公に馴染て悪心去て善心に立戻りてはゐ得は指て御咎めゐ間敷許は田村に問はせ給へと其後物は云さりける帝よりの宣旨には年人は観音の再來と聞く然れは魔女と夫婦に成ると日本長久の基ひ之相らず田村替か妻女と宣旨わり田村夫婦は慎んて御請有けれは重ねての宣旨には天下の政道執行ひ國土豐かに治むへしと宣旨にて冠装束玉はりける將軍こは有難しと三度戴き内裏を退出されける此事四方に隠れ無し霞野忠太二百余騎にては迎ひに罷り出さゝめき渡りて二條へ入せらゐ積り〳〵のは物語り打解て今一入のは恩みと成り玉ふ時立烏帽子此様如何に我君自らハ此誠に叶ふまじ明日にもあるあらハ鈴鹿山へ歸らんと五十日も立さるに男山の八幡より帝へ神使あり近江の國釜保ヶ原に住家をなす明石高丸高ゆろふとて恐敷き鬼神住めり是を退治仕つれとなり我君ハ討手を蒙り玉ひ安々と御退治坐在べし其時自らとハ罷り出御目に懸りやへし先夫迄はと伊勢國鈴鹿山へと歸らるゝ其後將軍公國家泰平に納めけり立烏帽子か言に違はず男山正八幡より帝へ神使ありけれハ年人を召との宣旨にて時の装束花かやに參

内し御階近く畏る帝の宣旨には度々太儀なるとなれと近江の國釜保ヶ原に明石高丸と云へる鬼神住家をなし人民に妨害なすに依り疾くに退治仕れとの勅宣之依て二萬の兵を指添らる將軍ハ謹んて御請ヶ上げ二條に歸らせ其後に霞野忠太を始めとして二萬三千余騎を卒ひて鎧腰巻太刀脇差色々の名馬に打乘て御供揃ひと聞えける御大將時の装束花やかに軍兵引具し江州釜保ヶ原へと發向わり彼所になれハ爰ヶ鬼神の住家よな此所ヶ變化の岩屋ゥと踏入り尋ぬれと更に住家の見えされハ猶奥深かく尋ねしに爰に怪やしき岩穴あり夫れと用意し駈廻れハ高丸是を見るよりもヤア六十疋の子供六百疋の悪鬼共何れも蹴散せと下知すれは鐵杖劔打振て一度にどつと乱入し追つ追れつ火花を散して戰ひける二萬余騎の官軍こ皆散々に討れたり年人此様を御覧して嗚呼口惜やと大弓を引詰め射懸れハ有難や田村か矢先千手観音の御誓ひ一矢放ては千の矢先とあり雨や霰れの降る如く鬼神の勢に射掛れハ眷屬殘らず討れけり高丸今は十六疋に討なされ會山指て逃にける傳教大師我立山とて追出ぞ力及はず高野山へと逃走る弘法大師ハ銘白歸白の法を結んて投けれは戸隠山へと逃けるが神罰あらたかに在坐ハ是も叶はずして常陸の國鹿島の浦へと逃にける鹿島大明神の神罰あらたにましまぞ所へ將軍二百餘騎にて追て下らせ玉ひ指詰め引結め放つ矢は雨や霰ゐの降る如く鬼神ハ叶はしとや思ひけん唐と日本の汐境に大巖ゥ岩屋と

て涙打ち懸る岩屋に逃入て石の遣戸をはつたと締忍びて是に居たりける將軍は今の行方を見失ひ玉ひ口惜や二萬餘騎の兵卒も僅か二百騎と成たり扨も無念の次第也と呆れ果てそ立玉ひぬ斯る所に又立烏帽子忽然と顯れ出如何に將軍公高丸を討漏し嘸や無念と思そらん去ながら自から智略にて討せ參せん唐と日本の汐境に大嶽か岩屋とて涙打懸る岩屋に閉籠ていまえれ早やとく急がせ玉へと申上く將軍聞召し其儀ならば兵船を用意なし船にて寄んと仰せける立烏帽子申樣是れ自らに御任せ玉へ自らが神通にて討せ參らん二百余騎の諸軍を皆御暇を玉はるへし田村も實もと思召し諸軍勢に御暇玉はり皆國々へと歸りける其後御夫婦は高輪車に打乘て雲井遙に登らる〻翌日午の刻に唐土和國の汐境ひ竹羅ヶ沖に止りける立烏帽子は指さしてあれなる涙打懸る岩屋の内に高丸親子忍びて候ぞ將軍聞召し然らば是より射て取ん立烏帽子聞召し心安く思射參らせんと天に向つて三度招き玉へは十二の星天下り星舞樂を催され靈香薫し花降て笙笛聞へいと面白く有難かりける次第也去ば八大龍王羽立田龍王坂田龍王發擅龍王龍神達は數千の眷属を引連れ〲涙間に頭を並へ五衰三熱の苦患を免かれ星の舞樂を拜みける高丸か娘の末子にてまたの前とて今年百六ッになる稚子あり高丸に縋付き如何に父上あれ天竺十二の星の舞拜み玉へ父上一目と申ける高丸聞て愚かな星の舞樂にはあらず人間の田村が身にて寄たる稚子舞と覺へたり必そ

〲遣戸を開くると猶も嚴敷扉を押へ叟ひ〲へて居けるにぞ子供は猶も縋り付如何に父上十二の星の音樂有難や情も知ぬ父上ぞやと縋り付てぞ泣にけり高丸今は笙笛に心を浮され石の遣戸を細目に明け片目に懸て拜めとて猶も用心嚴敷し半時計り拜みける星の舞のとなれは苦しみを免られて面白さに高丸も耐へ兼ね石の遣戸を押開き十六疋頭を揃ひて拜みける立烏帽子は是を見て早疾く向はせ玉へと白羽の矢を奉れは將軍弓に矢を番へよつ引て放つ矢は有難や數千の矢先となり鬼神殘らず討れける將軍車より下らせ玉ひ高丸か首を取り元の車に移らせ玉ひて三日三夜にて伊勢の國鈴鹿山に着玉ふて小林姫に會參らせ積り〲の御物語りて今一入の御悦びと成玉ふ將軍御二方の御威勢目出度かりける次第也去程に將軍公丑寅の方を御覽し玉ふに八尺余りの光る物左も恐ろ敷見ゑしを將軍不思議に思召され如何に立烏帽子あれは如何なる物なるぞ參ひ彼れは自らが文を下せし奥州磐井郡達谷の窟に住居なす大竹丸とて高丸に倍し三明六通備はりたる鬼神なり自らが文を通はせしに引替へて君と契り深ければ自らや御身を憎みて斯は眼を光らすと申上く將軍聞召し其儀ならば只一矢に射て與んと御座を立玉ふ立烏帽子は押止め去ば陸奥霧山の天上より白眼まなこにいへは爭てか叶ふまし自らが誑かりて安々と射せ參らせん程に御暇玉はるへし陸奥へ下り磐井郡に踞り越仮に契りを込て謀計を致さん早や御暇玉

れるべしと申上將軍夢の心地よてこれ何事そ御身陸奥へ下り大竹丸ふ誠の契り深くして我身の心替りなれ我れ何とふすへきそや別に思案のあらさるかと打ゑやれてそ仰せける立烏帽子是を聞思りの君の御諚かな恐敷き鬼神に君を替奉らん骨肉分けたる小林姫の有る中て如何よ心の變そへき諸神諸佛に誓つても何とて僞り申へき只大竹丸退治の爲なれれ早く御暇給れるへしと申上將軍聞召され今い至極の道理止へきも有ざれバ其義に任せと御諚よいさ其儀なら將軍公御上洛をまし〳〵て高丸退治を奏聞ありて天下を太平に爲さるへし然られ半年過ぎさる頃ふ加茂の明神なり帝へ神使有へし其時君れ討手を蒙り八萬余騎の軍兵を給れるべし左れとも軍兵れ皆返されて霞野忠太を只一人御供ふて下らせ給ひ四條の橋ふて暫し待せ玉へれ老人れ痩ふ痩たる葦毛の馬を引て來るへし價ふ任せて買取り給へ白川二所の關より彼馬に召れ給ひなれ達谷の窟の面の林よ止るべし其時に自られ達谷か岩屋を出て御目よ懸るべし先つ暫し御別れ申よ將軍此由を聞召し去れ立別れんと去給へ共流石よ夫婦の別れ故行てれ歸り暫し名殘を惜まれ共叶ぬとなれれ別き〳〵よ成り玉ふ立烏帽子は東を指て下りける然るよ將軍公は高丸か首を取持せ都を指て上洛あり頓て都に着けれは直と內裏へ參內在て始終を奏聞有れバ龍顏麗しく坐在て今よ始めぬ田村か忠勤高丸か首をは封し込て流そへしとの御諚なり頓て御暇を玉はり內裏を退出有て夫よ

り高丸か首を私かふ封し込み叡山の息玄座主の引導にて難波ヶ浦へ流させ玉へれ重ねて子細れ無りける其後國土安穩に治りける時ふ立烏帽子か云し如く加茂の明神より帝へ神使有て奥州磐井郡達谷か岩屋に大竹丸とて鬼神の住み來年の夏頃にも成ぬれれ都へ荒れ出れれ玉躰危し早疾く討手を下すへし神刀添て待させんと宣ふ御聲の下よりも神使は上らせ玉へバ帝はつと敬つて公卿大臣を召れ神使の趣き御評議あり大臣道房卿此度の儀も田村將軍ふ宣旨ありて然るへしと奏聞し帝叡聞まし〳〵て將軍を召との宣旨に將軍何事やらんと內裏へ上らるゝふ帝汝を召條れ別義にあらず太儀なから奥州磐井郡の達谷か岩屋よ大竹丸と呼ふ鬼神が住み明年の夏の頃よも成けれれ都へ登ると神使あり時刻移さす馳向ふて退治仕れとの宣旨にて八萬余騎を添られたり年人承て拜したるとあれは勅宣の御請申上け大軍よて下るなら國民の歎き如何計り年八一人罷り下りて退治仕らん只將軍に任せられ候得と奏しける何とふ任すとの宣旨なり將軍畏りて退出あり只此上い信心にまくれ無し抑も王城の鎮守にれ稻荷祇園ふ加茂春日別て祈らせ玉ふには清水寺の觀世音伊勢住吉を始として日本四十八ヶ所に神馬を引せ賜はれと深く祈誓を込られたり然るに烏帽子の云し如く白髮の老人葦毛の馬を一疋引來る將軍御覧し如何に老人其馬い賣馬成かと仰せけれバ參らんと答ふ其儀なら二條の御所へ引來れ價ひに任せて買取べし老人の悅び限り

無く今宵一夜は老の命を繋きすさんとすける故ふ將軍公聞召し共儀あら今宵一夜は飼馬せよと
て別れて其夜の明るを待居たり斯て夜も明けれは二條の城に引來り將軍御覽し夫にと有て永錢
三貫砂金十金玉はれ有難し〳〵と小腰をそらして押戴き其儘姿は消ふけり將軍は霞野忠太と諸
共に早裝束を改めて御門出ふ祝しける斯て將軍二條をは夜はほの〳〵と白川や祇園林の村鳥變
化の物ふ逢坂の關の明神伏拜み其昔蟬丸は玆ふ捨られ玉ふとや博我の三位と云ひし人雨のふる
夜も降ぬ日も風の立日も立ぬ日も三年通はせ玉へつゝ琵琶琴山と傳へしも舊跡之と打詠め小野
小町は百年の齡ひ呉竹の杖よ縋りてよろぼへ立出關伏越ると詠しも今こそ思へ合せたり鬪れや
愛ふ粟津ヶ原戀敷妻に近江路や瀬田の唐橋打渡りすそにいたこ森山の片田の落雁あれとかや石
山寺の晩鐘にいかみ山とはあれならん鏡ヶ山に照月は是そ誠よ洞庭の秋の月とは是そ迚大摺張
ふ小摺張寐の夢け醒か井の青墓宿に來て見れは袖に涙は垂井か宿笠着て忍ぶ鏡か宿實に陸奥の
花も咲あん軍瀬川尾張の熱田ふ着玉ふ此明神を伏拜み地領を過れは程も無く三河よ懸し八ッ橋
を早打渡り奥州の大竹丸を退治する矢矧の宿を早過て濱名の明神伏拜み夕川橋に入汐のさゝね
と登る海士小船さゝんざ諸ふ濱松の大天龍ふ小天龍斯られ金谷の宿を過ぎ思へ流るゝ大井川島
田川原を打過て花は咲なん藤枝や蹴揚て渡る鞠子川一ッ二ッと宇都のや峠山邊の端を清見ヶ關

ふ出玉ふあれ〳〵三保か崎互ひの涙も白雲も今一入の御慰み蒲原油井を打過て相摸川を打渡り
三島の宿ふ着き玉ふ大明神を伏拜み沼島か明て口惜き箱根山大權現を伏拜み大磯小磯早過て神
奈川渡れは程も無く武藏下總の境なる浮世に澄る隅田川此武藏野よ來て見れは月の入べき山も
なし霞の懸らん森もなく幸手程なく粕壁の坂打過て鬼神をいつか宇津の宮妻諸共ふ喜連川花咲
山を打過て白坂越て程もあく境の明神に着玉ふ爰へも參詣坐在て去れ敬に任せんと件の馬ふ召
れける其馬の早きと三ッ羽の矢を射る如し忠太は尾筒よ取付て矢吹新田も早過て日出の山科宿
夫山墨摺り流を籠川や牛田の小風袖ふ留め伊達の大木戸鎧越し松岡なる子捨川白鳥明神を拜し
水よ晴樂ヶ崎に差懸り龍門山よ着き玉ふ時に將軍公は霞野忠太を召れ如何に盛春承れ此御寺こ
つゝ大高宮にに月は入間の玉崎や名取川をも越玉へ見上て通る茂ヶや廣瀬川をも越玉へ鹿子淸
そ我れ先年勢熊と云し時學文致せし道場之懸る序でに參詣せんと思召し御寺へ入せ玉ひつゝ言
の葉を最と念比ふ御所念ありて立出見れは大澤や早今村の戀風に誘され人の身の上と千本くの
木赤崎や大明神を伏拜み高瀬川をも越玉ひ古川寺に着き玉ふ抑も此御寺とすれ鹿島大明神の御
社之天平寶字の頃大野朝臣東人と云ふ人是を開基玉ひて古河寺と書き古川寺と讀するなり御
歌に

古川や水の寄瀬ハ龍田川ゑるもゑらぬも相生の松

將軍も斯許り日の光古川寺に移しつゝ鹿島の神我を守らんと遊ハして江合川田邊の里飯の社を伏拜み一二の迫雞打坂靑笹峠打過て磐井郡に隱れなき一二の關や岩井川をも越玉ヘ達谷か岩屋の邊に着玉ふ暫し馬を乘放し息を繼き玉ふ懸る所に立烏帽子約束の如く忽然と顯れ出て御對面坐在て御物語り限り無し去ながら大竹丸は天竺初座王に出仕の爲め昨日午の下刻に立出し明日の中の下刻にならてハ歸りいハず岩屋の內へ入玉ひて緩々御休息在坐へしと先此方へとて手をとり岩屋の內へと入玉ふ然るに九十六疋の眷族手長足長天邪稻妻阿毘羅絕式部島坏といふ數多の眷族是を見て夫溢れ者餘さしと劍や鐵杖を打振て一度に吶と討て掛るを鈴鹿ハ此由を見るよも神通の法を掛置きて今宵は旅の御勞れ何の御氣支はいはし緩々御休息いへと夫より田村御夫婦の人々ハ穴奧へ入玉へ絕て久敷御對面互ひにかはせ手枕の御物語りハ限りなく斯る所に大竹丸ハ神通よて是を知り道より取て歸り岩屋の扉を打叩き大音聲にヤア眷屬共早疾く岩屋を開くべし眷屬共と呼べ共答へさりける大竹丸是を見てエヽ口惜や神通の御ために掛りしか出し起して取せんと口より火煙を吹かと見えしか岩屋の扉みぢんになり九十六疋の眷屬一度にとつと駈出る將軍御覽しそはや丸みんちやく丸の鞘を外して投掛れハ立烏帽子も大通連小通連顯明連等

の鞘を外して投掛きば惣して五振の劍ハ天地四方へ切廻る九十六疋の眷屬一騎も殘らす討れける大竹丸大ひに怒つて岩屋も崩る大音揚け死人を見てハ大願成就せぞ神通を改めんと云ふりと思へハ影も姿も矢にける田村將軍ハ是れハと計り暫し茫然之立烏帽子ハ莞爾と打笑ひ鈴山か絕頂に籠りていぎべ直樣追駈玉ふへし神通無てハ叶ふ間敷と劍を鞘に納め鈴山指て追懸る斯て彼所に成けきハ田村夫婦ハ大聲を上けヤア如何に大竹丸卑怯之田村夫婦か來るりや出會せよと呼ハれは既に神通備はつて七面の惡鬼百八の眼を瞋らし九十六の耳を振立て十六の足を踏裂き八十八の手を廣けエヽ口惜や過る年車に乘て都へ來る時夫婦諸共微塵になさんと思ひしに助け置きしハ無念之神通を改めんと思へ共帝とやらんを微塵にあし其後汝等を發目見せんと云ふかと思へハ蔭も形も消にける將軍是れハと仰せける立烏帽子ハ聞よりも既に神通備つたる鬼神なれハ最早三時も過きなハ玉躰最と危き之追せ玉へ箆嶽山麒麟ケ岩屋に神通を改めん早や疾急りせ玉へと箆嶽山へ急きける斯て麒麟ケ岩屋に着ぬ丸き岩屋のとなれハ何れか戶羽そと知さりける立烏帽子ヤ樣サア此上ハ人間術にて叶ひ難し觀世音菩薩を祈らせ玉へと申上る將軍ハ實もと思召し手水垢離よて身を清め天に向て一心不亂に祈りては岩屋の扉に手を當てエヽやつと押けれハ岩屋の扉微塵に碎けたりアラ有難や觀世音光を放ち岩屋の上に立せ玉へハ將軍御夫婦

これ有難しと禮拜ぞ神靈あらたに在坐て心静かに退治せよ猶行末を守らんと神ハ消させ玉へけり御夫婦ハあら有難と御跡を禮拜奉り心静かに岩屋に入て見玉へは大竹丸ハ八方へ鎖を以て繋れたり將軍御覽じヤア大竹丸天罰何如て逃すまじ鬼神ハ瞋より岩屋も崩るゝ計りの聲を揚け起上らんとする所をそれや丸の鞘ハつし大竹丸か首を討落せハ其首ハ岩屋の内を火焔を吹ながらくるり／＼と廻りしか將軍を目懸け甲の鍬形啣かと匡へたる此の時霞野忠太來り是を見て二ッになれと打けれバ彼の首ハ行方知れず成りにける立烏帽子見るより大通連小通連こんじやく丸そはや丸を投懸れハ大竹丸か手足寸斷に切落そ不思儀や生臭き風吹き來ると思へハ岩屋の震動夥多敷百千の雷ゟ一時に落來る如く雨風も烈敷成れバ左右から暗夜の如くゝ去れ共神力強くして神風さつと吹けれハ元の晴天と成にけり其後將軍大竹丸が髑ちをハ百姓共に仰付られ佐沼の江へ運ばるゝ將軍ハ夫婦ハ大竹丸ゟ首を愛や彼所と尋ね玉ふに出羽奥州の境なる山路と云所にて拾ハせ玉へける其後篦嶽に歸らせ玉ひて制札を改めて建て給ふ是制札の始めゝ其後責る敵も無しと霞野忠太を止め給へハ夫婦はハ車に召れ一先都へ登らんと車を早めて三時計りに伊勢の國鈴鹿山へと着給ふて小林姫にハ對面有て後に親子主從ハ物語り限りなし將軍御夫婦は一間に入給ひ今は所々の悪魔を討平け心に懸る隈も無く積り／＼の愛つらさ打解け麗むき玉ひしに立

烏帽子は何共物は云ずして將軍公の御膝に顔を上消入様に泣給ふ將軍ハ覽しては何事ぞ御身ハ狂氣志玉ふゟ大竹丸を退治心に懸ると無しと思ひしに何とて歎き玉ふぞや立烏帽子是を聞何と宣ふ將軍公我々夫婦は如何なる前世の宿業かや今日は變化翌日は鬼神退治迚一日片時も休らはず漸く悪鬼を討平け是迄と存それと愛ゝ悲きとの有り夫を我國の習ひにて下の女は廿九歳中の女は廿四上の女は廿二歳自らハ上の女にて最早常年十九歳十月五日の卯の刻には空く罷り成ていそ二世と懸たる妹脊と今宵計りまじ得バ明暮心も消々と泪にくれていへ今宵計りか悲やと又將軍に縋り付聲を上てぞ泣給ふ將軍夢の御心地にて暫し互ひに泣給ふ良有て將軍仰せける様ハ十月五日も程近し御身の先途を見届て其後成れ上洛致すべし名残ハ尽ぬ我妻よ悪魔變化を退治せしも皆是れ御身の知略ゆへ御身ゟ空敷成ならハ我ハ何と成へきぞと聲を上させ給へける立烏帽子是ハ諂愚かの君の御諚ゝ都にてハ上ハ帝を始め奉り下ハ卑賤に至る迄田村公此世になからん者ならハ日本ハ魔國に成へしと上下の侶徒部らぞ一刻も早く御上洛坐在て大竹退治を奏聞し御震襟を休め奉り市街の民を静め玉へ田村大將軍ゟ仰かき給ふ御身ゟ有なから斯く迄名残を惜ませ給ふに何事ぞと慰めらるゝ其内に夜ハほの／＼と明けれハ早や御登りいへし名残も尽ぬ自らハ磐へ空しく成迚も君の御出てなき内ハ三年四年過るとて色も姿も替らずして待奉りてい

そ御暇給ハらバ其時こそ空敷成へきそ骨肉分し小林姫のし得ハ契りハ尽ぬ別れとなれば心ゑ任せぬ憂世やと互ひに暫し歎かせ給へど叶ぬとなれバ将軍御涙を止め給ひて其儀なら約束違ハせ給ふおよ去ハ上洛致さんと名残ハ尽ぬ我妻とて袖を拂ふて将軍ハ都を指て登らるゝ頓て都ゑ成けれハ直に参内被成つゝ大竹退治を奏聞あれは帝御感限り無く誠に田村は人間の所為ならす此度の御賞として東海道十五ヶ國永代安堵給はりては盃盞を下され重ねての宣旨よは箇様の悪鬼を退治なし跡の祟りが如何ならん是より奥州よ下り如何成る神ゑ佛に灌頂し悪鬼を封し込て来るへしと宣旨あれば将軍畏りて退出し中納言道明卿と連れ立給ひて叡山の天台座主慈覺大師諸共よ再ひ奥州へは下向ありて頓て磐井郡に成りけれハ達谷の岩屋を引平け百八躰の毘沙門御建立相成り夫より達田郡篦嶽山へと登らるゝ岩屋を築き大竹丸か首を塚に築込み其上に観音堂を建給ふ慈覺大師の御作佛一寸八分の十一面観世音を建給ふ無夷山金梵寺と額を上け無夷山とハ恵比須無山と書せたり宮城郡富山にハ大竹丸り是を築込み観音堂を建玉ふ牡鹿郡槇山にハ大竹丸か胴を封じ込み観音堂を建玉ふ夫より佐沼の郷に大竹丸の死骸を埋たる所を三尺土を取て流す大竹り手を築込て観音堂を建玉ふ去るゑ依て此所を大竹村と子く篦嶽富山槇山大竹観世音ハ大竹丸り死骸を封しゐむ是れ奥州の靈地え以上改る所も無く依て都へ上洛有りて参内成され始終

の奏問あるバ帝叡聞坐在ては感甚た限と無くは賞玉ハりて退出なし夫より将軍公伊勢の國鈴鹿山へと急かるゝ鈴鹿山よ着けれハ直ゑは殿よ入玉ふ小林姫や女房達立出て只今は来臨ふしか父上様只今は入しかと歎きの中に喜びける扨も小林姫ハ父将軍に向ハれ母君にハ三年以前の十月五日卯の刻ゑ空しくならせ玉ふと歎き玉へバ将軍大に歎かせ玉ひ一間ゑ入て衣引除け見て有れは菩薩の姿容佛顔眠むる様に伏居たり将軍は側ゑ座し如何に立烏帽子約束なきハ是迄参りしえ姿も色も替らそして待玉ふか煩ハしやと顔よ御手を掛させ玉へ髪を撫撫て種々と口説き歎きせ玉へけるあら不思議や立烏帽子は目を開かれてあら珍敷や将軍様は約束違ハすよは出有し嬉しさよ御約束ゑてしへバ姿も色も替らすゑ待奉りしえそれハ別の子細にしいそ形身を送らん其為なり大通連をハ我君ゑ奉り小通連をは内裏へ納め奉り素志賓劔内待所と諸共よ日本の宝と成され劔明連と子せしハ代々家に傳ハる劔なれハ小林姫よ取らそべし形身ハ人の無き跡の菩提の種と聞からゑ數多の宝のしを女房達に参らせん自らを思ひ出せし度毎ゑ念佛なして玉ハるへし如何に小林姫親子ハ一世の縁なれハ是か別れの物憂よ父上様にハ猶も孝行仕れ母か菩提も弔へよ名残惜しの將軍様最と惜しの小林姫や切て此姫十五歳にも成しならハ田村の家を繼せてたべ是迄成りと言ふのと思へハ色も姿も替り来て見るゑ哀れの増りける将軍親子にハ袖や袂に縋り付歎

し歎かせ玉へ共其甲斐更に無りける將軍涙を押止め一度人間の我に契りを込けれハ和國の禮を行れんと鈴鹿の麓に送られ千駄の柴を積み無常の煙りとなし貴き御僧に引導せしめ千本の卒塔波を立て御吊ひけり去れ共將軍公ハ夫婦の別れ深くして暫しハ涙止まらず然れど歎きて歸らぬとなれハ將軍公小林姫を抱上け暫し安眠玉ひて御夢に不思儀や立烏帽子と諸共に山を越へ供に歩むと思ひしか一ッの內裏に着玉ふ時に大王笏を取直し夫れ田村ハ觀世音の再來なれバ死せさる者なり婆婆へ歸すべし女其ハあらさる分限にて惡事なしたる罪により火紅大國へ落セべし田村將軍承り佛の言葉にも夫婦ハ二世の契りとあり女に科の有ならハ夫の我も科在へきに我を歸され女も歸し玉へと奉したり大王御聞有て田村ハ觀世音の化身にて和國の惡魔を退治たり其功に依て早疾く歸しける臣下大臣是を聞去ハ尾張の國志賀の里に金岡八郎か一人姬小松の前ハ七日前に空敷なり父母悲しみ歎かれて未た此土に送らぞ是れに立烏帽子の心を入替てたひ玉へと奏聞す大王ハ現在なれや〳〵と錫杖振給へハ田村の夢ハ覺にけり枕を上けて見給へハ八ッ棟造り檜皮葺の屋形もなく女房達もいハず鈴鹿山の澤奥に石を枕として小林姬を抱き宿り居れり將軍大に驚き扨不思儀やと思へ共元より變化のとなれバ屋形とても有間敷去ハ都へ登らんと小林姬を伴ひて都を指て登られける斯くて金岡八郎が娘め小松の前ハ一度空しく成られしも七日

を經て再ひ蘇生有りけれハ親子悦ひ限りなかりし夫ハ偖置き將軍ハ上洛ありて直に內裏へ參內ありて御階近く畏り有しとも奏しける帝叡聞有て金岡八郎を召れける八郎ハ命に隨へ何事やらんと參內し有し次第を奏聞せ田村が無常の物語りと割符を合する如く之帝叡聞坐在て金岡八郎か娘を田村年入が妻女とすへしとの勅使之將軍金岡ハ有難しと內裏を退出セ其後小松の前を田村の方へと送らるゝ談ハ小松の前なれと心と魂ひ立烏帽子再ひ契らせ玉へける去に依て小松の前を先立て度々の惡魔を御退治有り小林姬十五の春の頃大納言年秋公に御緣を結ばせ玉ひ田村將軍年宗と任せられ御代を讓らせ御隱居せられ將軍八十四歲にて御他界あらせれ勢州鈴鹿山の麓に田村大明神と祭られ末世の衆生を守らせ玉ふ之去程に小松の前ハ九十六才にて薨去あらせられ鈴鹿山に移し鈴鹿大明神と崇めバ末世を守らせ玉ふ之是に依て田村大明神鈴鹿大明神ハ妹脊の御神と祝ひ奉る小林姬ハ百十六歲にて六位の地藏と顯れ給ふ惣て京都音羽山淸水寺を御建立あり大同二年又奧州の篦嶽山富山槇山大竹達谷か岩屋に百八躰の毘沙門鬼首白山權現惣して日本二百十ヶ所の觀音堂御建立在たり是とても日本神國なるにより變化惡魔の退治に神佛現れ玉ふならん誠に田村將軍の御繁昌天下泰平國家安穩百皇五穀の御祭り月に盛なり日に增て目出度かりける次第なり

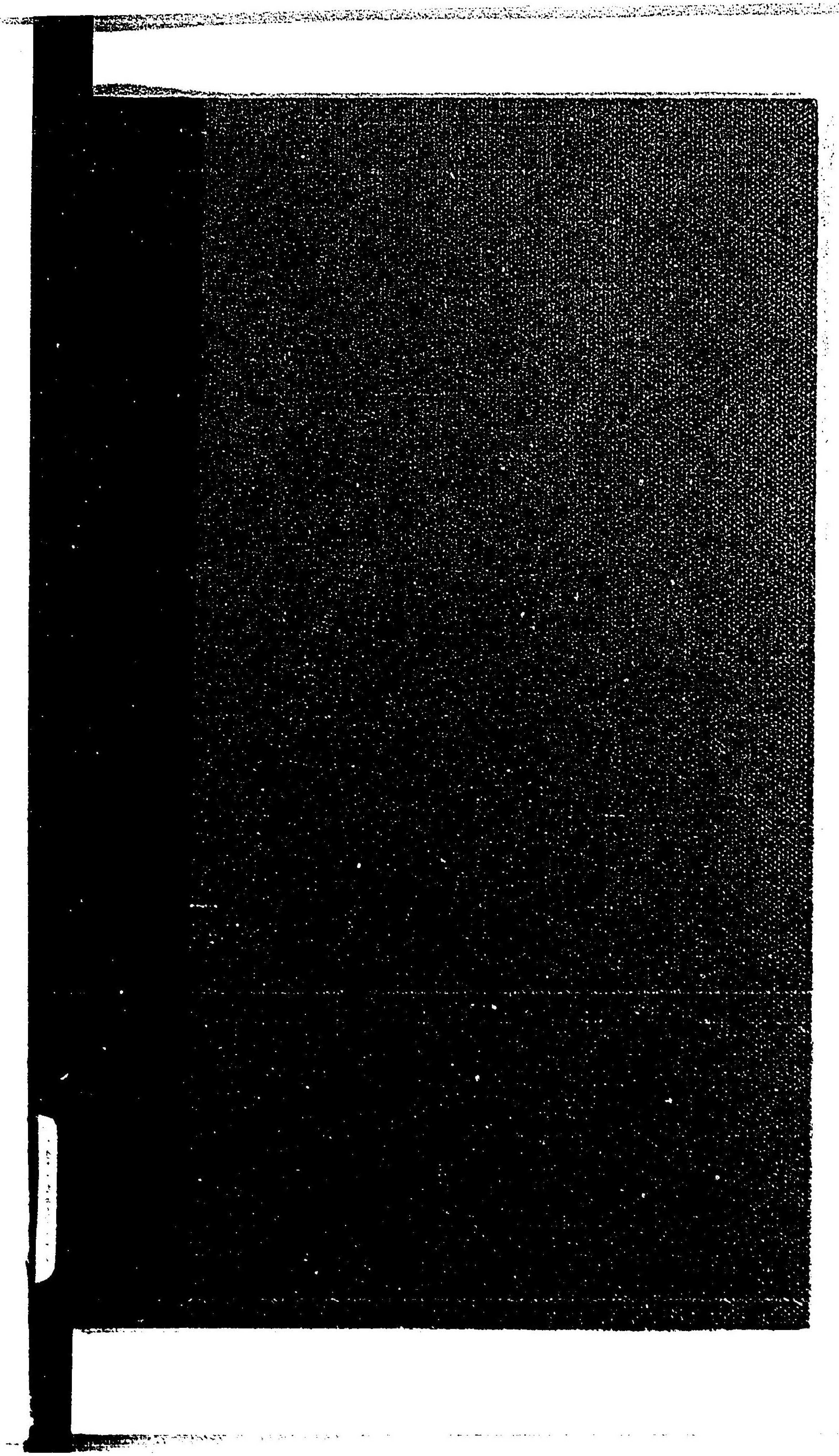
田村三代記大尾

3C-12

明治二十六年三月廿八日印刷
同　年三月廿八日出版

印刷兼發行者　辻岡文助
東京市日本橋區横山町三丁目二番地

發兌元　金松堂
東京市日本橋區横山町三丁目二番地



091049-000-2

特54-534

田村三代記

金松堂

M26

DBN-1825